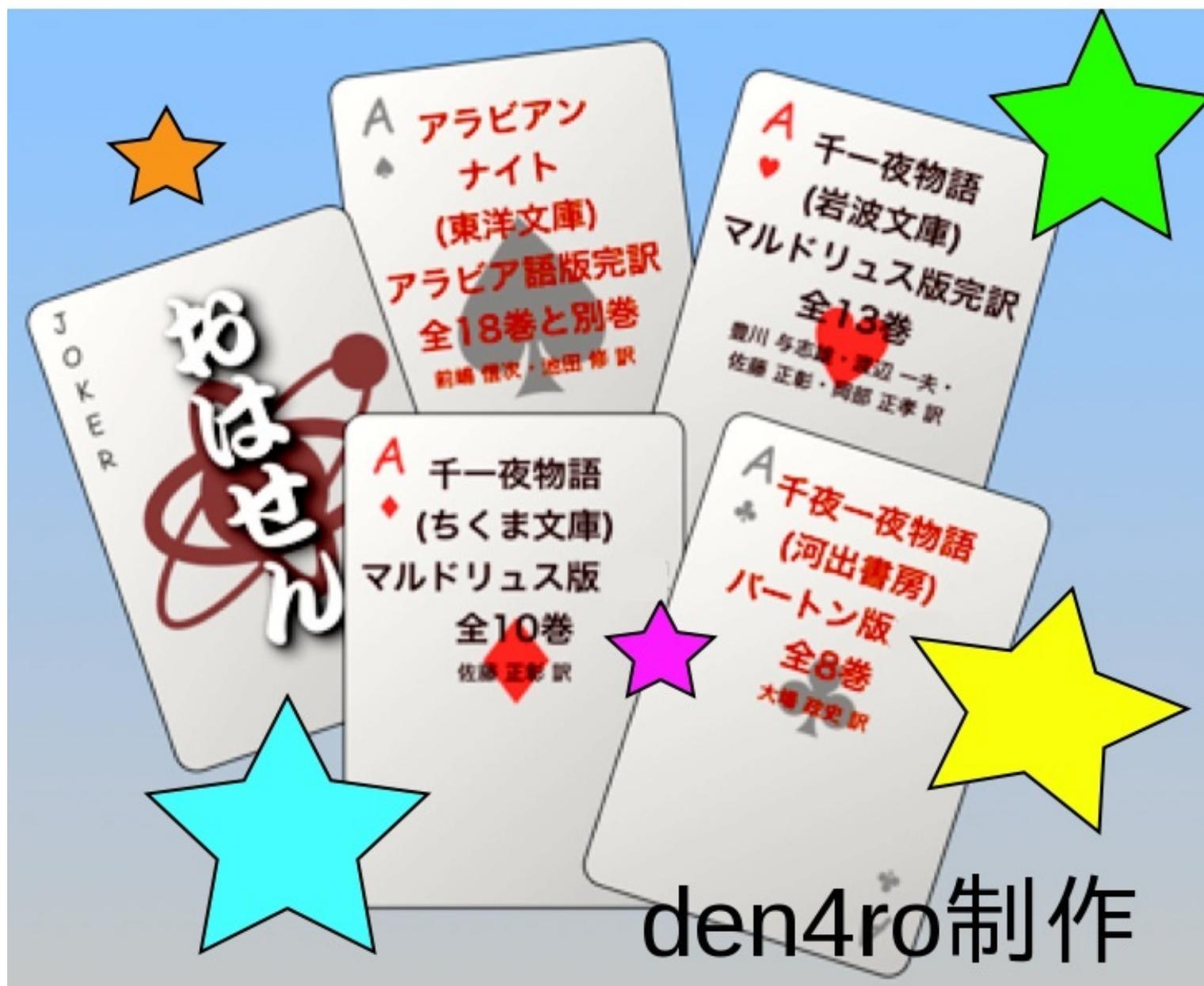


おはよう、千一夜



「おはせん」アーカイブ
2001～2004

若さ故の過ち？

「おはよう、千一夜」

平成 13～16 年、(西暦 2001～2004) にかけて私が作ったホームページです。千一夜物語を読んで好きになったのでその感想なのですが、結局三年で行き詰まったのでした。最初は意気揚々とつくっていたのだけど、これを見た知人の感想が内容ではなく、「です、ます調が統一されていない」と云わまして。文才がないのを思い知ったのです。それから見直しては作り替え、見直しては作り替えで・・・頓挫しました。

パソコンが壊れたこともあってしばらくご無沙汰してましたが、それでも最近ほそぼそと作りなおしていたのです。でもそのサービスが終わってしまって公開できなくなったので、ここパブーで本にできることを知りとりあえず昔作った残骸を中心にまとめておきたいと思います。

自分で読み返すとこの頃はこんなことを考えていたんだなあと懐かしいやら、恥ずかしいやら・・・ですが、とりあえず掲載時のままです。また新しく作り変えますね。駄作ですが、私がアラビアンナイトが好きなことが分かっていただければ幸いです。どうか皆さんも一度アラビアンナイトを読んでみてください。

題名は千一夜物語が好きなので「おはよう、千一夜」にしたのですが、主に東洋文庫の「アラビアン・ナイト」アラビア語原典(カルカッタ第二版)翻訳版を中心に書いてます。

目次

アラビアンナイト入門

おはせん、アーカイブ

その他

収録している物語がわかるように各版のもくじを掲載しています。

アラビアンナイト入門

これが一番最初に作った「おはせん」の前身「アラビアンナイト入門」です。平成13年より前？懐かしい
というか覚えてないや。まさか残っているとは思ってなかったのですが、見つかったのでそのまま掲載し
ます。後半は当時見ていたテレビのことを書いていたのでカットしました。

アラビアン・ナイト入門

その生い立ち

原作者

アラビアンナイトと呼ばれる昔話が有るのを知っていますか。

今から千年ほど昔、アラビアで生まれた”おとぎ話”です。

街の講釈師たちが物語をみんなに話していました。

”その時”の現代劇、時代劇、昔話、そして

世界の話（をイスラム風にして）を千一夜と言う枠物語にまとめて。

この講釈師の台本（写本）が近代にヨーロッパに伝わり数多く訳されたのです。

翻訳者

千一夜、千夜一夜、アラビアンナイトなどいろいろ呼ばれているのも翻訳者によって違うからです。オリ
ジナルがハッキリしていないのでどれが正しいとかはありません。講釈師が脚色して自慢の”のど”を聞か
せていたとのことですから、もとは粗筋なのでしょう、そのまま訳すことはできませんね。ですから訳者によ
って様々なアラビアンナイトが存在します。始めてヨーロッパに伝えたガランは機械仕掛けの空飛ぶ馬
を”魔法で飛ぶ馬”と訳すなど、かなりファンタジックに訳したそうです。ところがそれまで聞いたことも
ないストーリーにびっくりしたヨーロッパでは大ヒット、アラビアンナイトブームが起こり、それで本格
的に訳されるようになったそうです。それ以降、世界の物語にアラビアンナイトの影響が見られるのです。

枠物語

特徴

アラビアンナイトは様々な話を枠物語でまとめてイスラム風にしたものです。その特徴をあげると一つは奇跡が起きないことです。おとぎ話には神や仏が奇跡を起こす、宗教的なものになりがちですが、アラビアンナイトには神は出てきません。それがイスラムだからです。問題はイスラムに関係のないお話はそれらしく変えなければいけないことです。他の神様が出てきては困りますから、これらの神々は魔法使いや魔人になってしまいました。不思議な話なのですが奇跡ではないのです。

寛容

もう一つの特徴は、物語のテーマが”寛容”になっていることです。千夜に渡って語られる枠物語。一般的に少女が殺されない為に物語を語り続ける話として知られていますね。少女は相手を喜ばせて自分だけ助かろうとしたのでしょうか。イスラムでは寛容が美德とされています、解りやすくいうとケチをすっごく嫌います。聞き役は”ケチ”つまり心が狭くなって罪をゆるしたり物事を公平に考えられなくなった不寛容な王様。少女は身の危険をかえりみず寛容の大切さを判らせる為にお話をしているのです。だから語られる物語はテーマが寛容になるように作られているのです。そして聞いている不寛容な王様とは、つまり読者の私達自身なのです。摩訶不思議な物語が夜な夜な語られる枠物語はとっても重要な設定なのです。

傾向と対策

背景を知る

歴史

アラビアンナイトの舞台は10世紀前後ですが、まとめられたのは12世紀頃からと考えられています。千年前のイスラム世界を知っているとアラビアンナイトがよりイメージすることができて、楽しく読めるのではないかと思います。しかし、日本ではイスラム世界の歴史はほとんど知られていないと思います。なぜなら日本はヨーロッパから教わった為に、ヨーロッパが昔から進んだ文化を持っているように思っているのです。実はヨーロッパはその昔イスラム世界からいろいろと教わったり買ったりしていたのですよ。アラビアンナイト時代のイスラム世界は先進国（地域）なのです。

宗教

イスラム教を知っていますか。知らないですよ。 ”なんとなく”知っている。それは多分マイナスイメージではないですか？。そこが問題なのです。それではアラビアンナイトを楽しむことはできません。なぜならイスラム教の”戒律”はイスラム世界では”法律”だから。アラビアンナイトを楽しむ為には、イスラム教を宗教としてではなく、この社会の仕組みとして知ることが大切なのです。

イスラム世界

アラジン アラブの政治

アラビアンナイトでもっとも有名な物語と言えば「アラジンと魔法のランプ」ですね。アラビアンナイトの枠の中には入っていませんが、有名なのでアラビアンナイトとされているのです。アラジンを例にしてイスラム世界とは何かを考えてみましょう。

アラジンは魔法のランプを手に入れました。ところが、王女を妻にするのにはランプの力を使わず、合法

的に王女を妻にもらおうとしています。これはディワーンという政務でアラビアンナイトにはよくでてる王様と市民との直接対話があるからできるのです。だから母に頼んで王様に直接直訴しているのですね。

アラブ人はもともと遊牧をしていました。そこで、荷物と情報を運ぶ商業が発達していったのでしょうか、その為にはどこの国でも民俗でも宗教でも関係なく取り引きができる国際法が必要になりますね。しかし、法律とは罪に罰があるだけですから、見つからなければ罰せられないし、罰が軽ければ守られない、また、当時は都市国家ですから城壁の外に出れば守る必要もない。そこで王様はイスラム法学者を呼び寄せてイスラム法を導入したのではないでしょか。

イスラム法は宗教の戒律を法律にしていますから法律を守ると天国に行けて、法律を守らないと地獄に行くのです。みんな自分から進んで法律を守るのでイスラム法を採用しているところならば、どこにでも行けて誰とでも取り引きができるのです。イスラム政治を行なうことで王様は商人達を集めて国の税収を高めることができます。しかも、どこにでも行けるということは市民という概念がないということですから選挙はできませんね、この国は独裁政治なのです。王様には、とても良い政策のように思えますね。ところがイスラム教では”人間は平等”となっていますから、王様のような支配者は認められません。王様として認めてもらうには自分が神の代理であることにするのです。神様は公平ですから、市民に直接対話をして自分が公平に政務していることをアピールするのです。公平でなければ商人は逃げて行くので、砂漠の商業国家は潰れてしまうのです。そうイスラム世界では、自由に移動して国（王様）を選べられるのです。

選挙や試験といったものはありませんから、アラジンのようにだれでも王様になることが本当にありうるのですが、政務ができなければ商人はみんな逃げていくので本当は優秀な王様しか勤まりません。

シンドバッド アラブの商人

「シンドバッド七つの航海」はアラビアンナイトの枠の中に入っている一番有名な話しです。シンドバッドを例にしてイスラム世界とは何かを考えましょう

シンドバッドは、同名の荷担ぎシンドバッドに物語を聞かせるという枠物語で構成されています。しかし、自慢話をしているわけではありません。荷担ぎシンドバッドの「金持ちはいい暮らししてるなー」と言っているのを聞いた商人シンドバッドは荷担ぎを招き入れ、自分はこんなに努力をしたのだよと、自分の苦難を語っているのです。

イスラム教では運命はすべて神様によって決められていることになっています。しかしそれは、この世の幸せ、不幸せであって、あの世のことではありません。天国に行くか地獄に行くかは自分次第なのです。イスラム教の神は願いを叶えてくれる便利な神様ではありません。「神を恐れよ」とあるようにイスラム教の神は最強の神、決して逃げられません。つまり、人間は必ず神の元へ召されます（死んでしまいます）。あの世で永遠に暮らさなければならぬのですから、「天国と地獄どっちがいい？」と究極の選択を迫っているのです。もちろん天国ですよ。ではどうすれば行けるのでしょうか？。それは貧しい人への施しや公共施設の運営をするのです。しかし、そのためには儲けなくてはなりませんね。

イスラム世界では。イスラム法によって、どこに行っても取引や商売ができるのですが、だからといって成功するとは限りません。商売は競争ですからほとんどの人は失敗してしまうでしょう。失敗して不幸になったら法律を破って悪いことをするかもしれませんね。そうならないように福祉をしなければいけません。誰がするのでしょうか。それは、商売で成功した人です。イスラム教では”人間は平等”であり（才能や貧富に）違があるのは神が必要だから決めたことです。成功して金持ちになったのは神が貧しい人に施しをさせるためであり、気前よく施せば天国に行けるが、しないと地獄に行くことになるのです。失敗したら、それは神が天国に行くための試練（貧乏）を与えているのですから施しを受けながら真面目に働くのです。貧しいからといって罪を犯すと地獄に行きます。そうイスラム世界の経済は回っているのです。

シンドバッドは成功したので貧しい人達、つまり荷担ぎのシンドバッドに施しを与えているのです。自

分の気前のよさを見せることで「神様が大金持ちにしてくれたのだ、あなたもいつか成功するさ」と希望を与えて、自分の苦難の航海談を聞かせることで、「幸運か不幸かは神が決めることだ。天国に行きたいのなら不満を言わず努力しなさい」と商売の努力の大切さを語っているのではないのでしょうか。

アリババ アラブの奴隷

「アリババと40人の盗賊」はアラビアンナイトの枠外の話なのですが、アリババを例にしてイスラム世界とは何かを考えましょう。

アリババとはどんな話だったか覚えていますか。アラジンやシンドバッドのように有名でありながら、あまり記憶にないでしょう。それはアリババが本当の主演ではないからです。主演は召使いの少女つまり女奴隷ですね。アリババが見つけた盗賊の宝の洞窟を、開けゴマのゴマを忘れた兄のおかげで盗賊にばれてしまい、盗賊に追われる羽目になってしまう。この窮地を救った、奴隷の少女が活躍する話なのです。

イスラム教では奴隷を解放するとどんなに悪いことをしても天国に行けるとされています。つまり開放するためにまず、購入しなくてはなりませんね。奴隷商人は高く売るために教育をしますから奴隷はとても優秀なのです。普通、奴隷は家族の一員として暮らします。アラビアンナイトで開放奴隷と呼ばれているのは給料をもらっている奴隷のことです。また奴隷からすると主人は今で言うところの企業・会社ですから就職するようなものです。つまり出世することを考えるわけで開放されたくはないのです。本当に奴隷を開放するということは今で言うところのクビになるようなものです。イスラムでは奴隷役人が出世して王様や権力者になっていくのです。つまり奴隷はエリートなのです。アラビアンナイトが完成したのはエジプトのマムルーク朝時代と言われていますが、マムルークとは白人奴隷（トルコ系）のことです。イスラム世界は本当に奴隷が支配する世界なのです。

奴隷の少女は、この成り金のアリババ家の玉の輿に乗ることで大出世なのです。つまりシンデレラストーリーなのです。ちなみに40人の盗賊の40とは"多い"をあらわすということでアラビアンナイトではよく出てくる数字です。

以前のホームページ平成13～16年をまとめたもの

おはよう、千一夜



h13/04/30 abc den4ro
den4ro@par.odn.ne.jp

[ピンボケ、千一夜
雑記など](#)

[den4ro まいページ
日記と掲示板](#)

アラビアン・ナイトを説もう♪

千一夜物語、
または、千夜一夜物語
はたまた、
アラビアンナイト (エンターテイメント)
それは約300からなる不思議な物語
魔神と魔法使い、恋と寛容、商人と冒険、
めくるめく続々登場へ・・・

[入り口](#)

--- お知らせ ---

ちっとだけリフォームしました。5/21

特選42 [大人と子供の千一夜 1/28](#)

[2周年記念](#)

最終更新は H 16/05/21 です



慈悲の神 慈愛の神 アッラーの御名によりて

アッラーよ称えられていませ、世界の御あるじよ。また祝福と平安とが神の使徒らのおさ、われらの長、われらの主となるムハンマドとそのご一家のうえにありますように。永遠にかわることなき祝福と平安とが、裁きのあるその日までつづきますように。

さてつぎに、先人たちの行跡は後人たちへの教訓となつてゐる。すなわち世人は、他の人びとの上に起こつたことどもを見て、身の戒めとし過ぎし世の諸民族の歴史、およびそれらにふりかかったことどもを見て、その行いを慎むのである。されば先人の歴史をもつて後進の教訓となしたまいし御方よ、ほめたたえられていませかし。さてここに千夜一夜とよばれる物語集はかかる規範のひとつで、その中には不可思議な物語や寓話などが含まれてゐる。

(序話引用)

「アラビアン・ナイト」
前嶋信次・池田修 訳
平凡社・東洋文庫
全十八巻と別巻
アラビア語の原典からの訳。

特選

もどる

2周年 本箱 記 入門

特選 01

アラビア語原典完訳版、アラビアン・ナイトとは・・・

千一夜物語は訳者によって内容が異なる。日本で読まれた千一夜物語はもともとヨーロッパで訳されたものであり、モトであるアラビア語からではない。問題はそのヨーロッパの訳が正確ではない(^o^)らしい、実はこの過程がおもしろいので関連書を読んでみてね。

今まで日本で読まれていたのはマルドリユス版かバートン版だとおもいますが、どうしても脚色が著しい。しかし、嬉しいことにアラビア語から直接日本語に訳されたものが読めるのですよ。

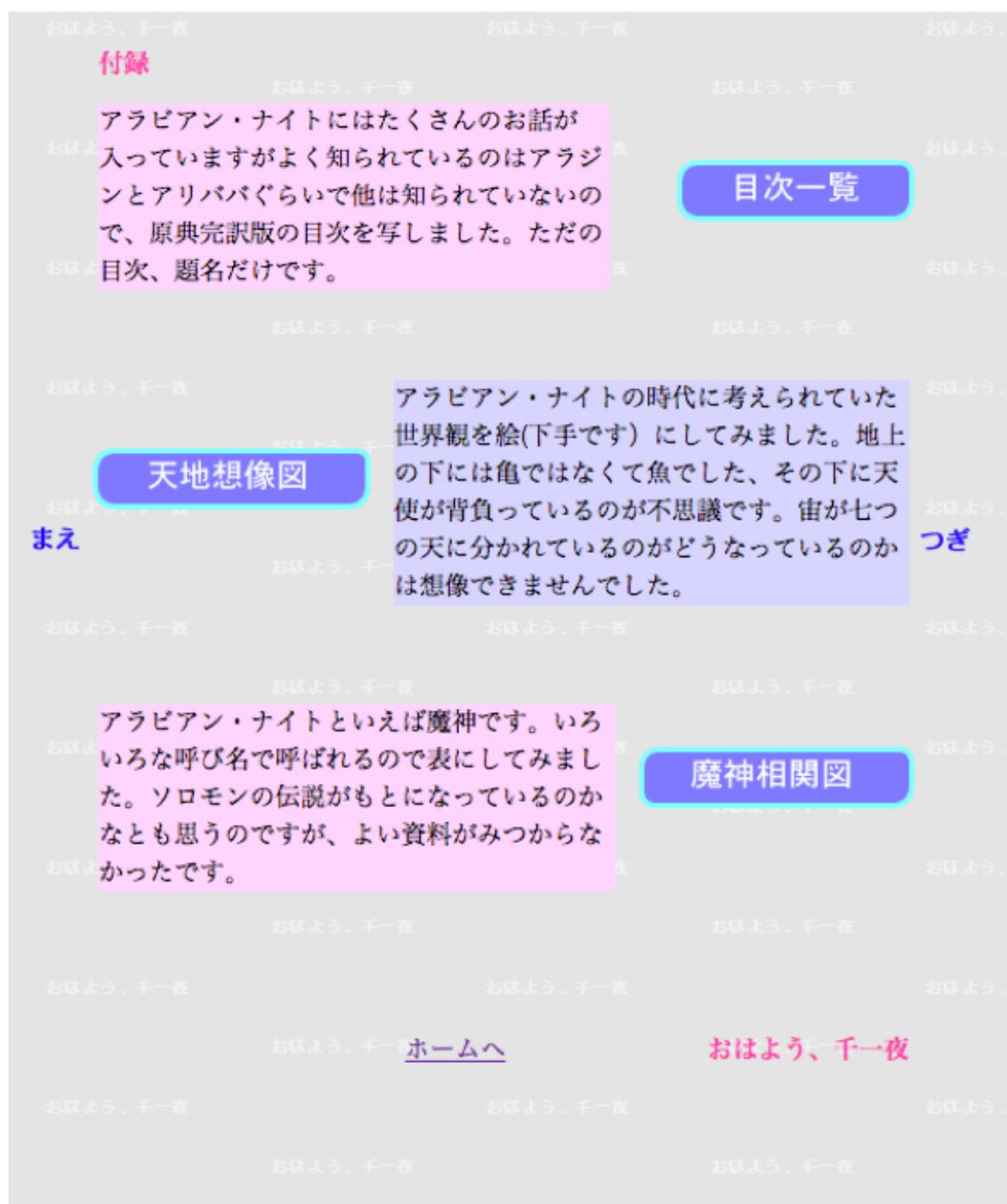
それが東洋文庫のアラビアン・ナイトです

古いアラビア語が難しいだけでなく、その当時の歴史がよくわかっていないので訳するのに20年以上かかっています。そもそもアラビアンナイト自体がその時代を知る貴重な資料であるのだからかなり大変な作業だったのでしょうね。物語のおもしろさとは別に千年前の世界、全盛のイスラム世界を知ることができるので注釈やあとがきがとてもよいです。高価な本ですがが貴重な宝であると思います。

もともと講釈師の台本で特に脚色されていないので読み物としてはあっさりしているますが、そのぶん想像を働かせて空想してくださいね(^_^)

そのための役に立つように「おはせん」をはじめることになりました。

でも内容はいい加減・・・ですよ(^_^)



目次は

別途。あらすじも原書を読んでほしいので省略。



魔人相関図

魔神・陸海空 四十の団体 一団は六十万	ジャン	ジン ジンニーヤ	シャイターン 悪魔・サタン	イフリート イフリーター	マーリド
通称 ジャン・ジン	○	○	○	○	○
通称 シャイターン			△	○	○
性善 (ムスリム)	○	○	△		
性悪	○	○	○	○	○
寿命	短い	←————→			長い
凶悪・穢悪	弱い	←————→			強い
その他	グール グーラ (卑劣)				

神はまず天使ガブリエルに大地から土をもってくるように命じた。つぎに天使ミカエルに命じた。しかし大地は渡さない。ついに死の天使を遣わした。死の天使は黒、赤、白、の三色の粘土をとって戻ってきた。これから神は**アダム**を創った。神は天使たちにアダムの前に平伏せよと命じた。従わないイフリートに石打ちにされるべしと神は怒った。流れ星が見られるのは神がイフリートに石を投げつけるためです。

天使は**光**から創られた。

イフリートは**火**から創られた。

人は**粘土**から創られた。

魔人相関図の解説

千一夜には魔神がでてくる話が多い。変身したり、空を飛んだりできる。人間と結婚することもある。どう考えても人間より優れているように見えるが、**神の代理**である人間の方が偉い？のである。イフリート（魔神）は体の中を火が回っているので怪我をするとそこから火が飛びだして体を燃やしてしまう。天使は天の使いなので、人間よりは上だと思う。

天使>人間>魔神 なのだろうか・・・

伝説ではダビデの子ソロモン（スライマーン）はその指輪の力で魔神たちを従えた。

魔神を壺に押し込めたのもソロモンである。また空飛ぶ絨毯も持っていたが魔神の軍隊が乗れるほどかなり大きいものです。

ジン、魔神と言われているが、ランプの精といわれるように妖精でも良いはず、でもイメージが・・・
悪戯をするのはやはり、悪魔、（サタン、シャイターン）かな（^-^）

ジャン族のなかで**善人**はジン（男）ジンニーヤ（女）、

悪人はイフリート（男）イフリーター（女）

最強のジンはマーリド・・・と人間が勝手に呼んでいるだけ？

はっきり区別されているというわけではないように思います。

特選 03

アントアンヌ・ガラン

こんにちのアラビアン・ナイトがあるのは十八世紀はじめのころガランがヨーロッパで出版したアラビアン・ナイトがヒットしてオリентブームが起こったからだそうです。

フランスの東洋学者であったガランは単体の「シンドバードの物語」を訳しているときに千一夜物語？の中にも同じ話があることがわかったので千一夜物語のテキストを取り寄せて訳し始めた。つまり十八世紀始めヨーロッパでは千一夜物語は知られていなかったのですね。

千一夜物語の中のシンドバードの物語と単体のシンドバードの物語は、ほとんど同じなのですが最後の話が全く違う話になってる。そのため原典完訳版アラビアン・ナイトでは7話目が2種類入っています。

「黒檀の馬の物語」は空飛ぶ機械の馬の話であり、中世アラブは機械仕掛や時計などが発達していたことが背景にあるのだが、ガランは「魔法にかけられた馬」と今でいうファンタジー風に訳している。時代からいうとこのガランの千一夜物語の影響がのちにファンタジーになるのですけどね (^_^)

なぜ？

ガランが使っていたテキストは全部残ってなくて、有名なアラジンとアリババはアラビア語の原稿がわからず、ガランの創作の疑いが・・・

原典完訳版のアラビアン・ナイトでは、もともとアラビアン・ナイトに入っていないアラジンとアリババは別巻になっています。

特選 04

国書刊行会 「千夜一夜物語 ガラン版」井上輝夫訳

初めてネットで注文した本です。二話しかないのでちょっとがっかり。

「盲人ババ・アブダラ物語」

短い話だが、千一夜らしさが良くでている。

魔法使い（僧）と商人。隠された財宝。

実際エジプトなどの王の墓には財宝があるわけで・・・。

強欲を罰して、寛容の美德がありイスラム的。

僧は最初から結末がわかっていたかもしれない。

「アラジンの奇跡のランプ」 一般に魔法のランプと呼ばれる話。

中国のアラジンにアフリカから魔法使いがやって来る。まだアメリカ大陸が発見されていない当時、文字通り世界の西から東まで、商人による貿易つまりイスラム圏が盛んだったことをあらわしています。アラジンと姫は当時の中国の風習から一緒に踊ったとあるが、どう考えても本当の中国の話とは思えないですね (^o^) 魔法使いは今で言う科学者？になるのかな (^_^)

魔法のランプによって幸せになっていく印象があると思うが、アラジンが商人達との付き合いや、王の姫婿になったあとは遠征などで、成長している様がポイントですね。

葡萄酒を飲んでいたり、わるいユダヤ教徒がでてくるがこれは当時のイスラムは主に政治的なもので実際にはたくさんのユダヤ教徒やキリスト教徒がいたからですね、イスラムの世界であって今のイスラム教とはかなり違うとおもわれます。イスラム世界は 正しい=合法=イスラム 悪い=違法=偽イスラム となるので悪いイスラム教徒はいないので、悪者は異教徒か魔法使いなどの表現になるのだらうとおもいますが・・・。

特選 06

シンディバード（シンドバード）物語群

賢者の物語です。

「女奴隷タウッドゥドの物語」

第四百三十七夜 10巻

「女たちのずるさとたくらみの物語または七人の大臣たちの物語」

第五百七十九夜 12巻

「インドの王ジュライアードと大臣シャンマースの物語」

第九百夜 17巻

「女奴隷タウッドゥドの物語」では主人公が奴隷少女というのもアラビアン・ナイトらしさがでている。当時のイスラム世界の奴隷は今我々がイメージする奴隷とは違ってかなりのエリート？だったらしいよ(^-^)

アラビアン・ナイトにはヒロインが女奴隷のケースが多いです。現実には家柄が良くても美人で教養があるとは限らないが、高価な女奴隷なら間違いなく美人で教養があるから？私の一番好きな物語です

「インドの王ジュライアードと大臣シャンマースの物語」は統治論理物語。支配者である王はどうあるべきか？をといている。

これらの物語の中の討論を通じてアラビアン・ナイト時代の人々の考え方やイスラム世界の参考になります。

歴史上実在した人たち

ハールーン・アル・ラシード

アッパース朝第五代カリフ。（カリフとは教王のこと）
在位786-809（西暦）

イスラムはムハンマドが神の声を（天使から）聞いたことから
はじまり、ムハンマドは最後の預言者（予言者じゃない）である
から後継はない、カリフとは預言者の代理のこと、現在カリフ制
は無い。信徒の長（おさ）という意味のアミール・ル・ムウミ
ニーンとも呼ばれる。

教王と訳されるが、実際は宗教よりも政治の実権があったと思
われる。江戸幕府の将軍のような感じ？。ただ実力者の傀儡政
権？だったらしい(^_^)

ジャアファル・アル・バルマキー

バルマク家のジャアファル

ハールーン・アル・ラシードの宰相（大臣の中で一番偉い）

インドの仏寺ナウ・バハール（玄奘三蔵のいう新寺）の長官の
一族がイスラムに帰依してバルマク家となりアッパース朝の初期
に栄えた。本来は父のヤフヤーが宰相でその長男がファドル、
ジャアファルは次男である。

マスルール

首切り役人。ハールーンの護衛役。黒人宦官。
マスルールとは幸福と言う意味。

[ホームへ](#)

おはよう、千一夜

特選 08

水戸黄門・千一夜

アラビアン・ナイトにはカリフ（教王）ハールーンが出てくる話が50ほどある。ハールーンはジャアファルとマスルールをともなって商人になりすまし、街中に飛び出しているいろいろな出来事に遭遇するというパターンの話。実在のハールーンも実際に変装して町をぶらついてたと伝えられている。ハールーンの統治した八世紀ごろのアッバース朝がイスラム世界がもっとも栄えた時代であったため、後世の作品もこの時代が舞台の設定になっているようだ。実在のハールーンはかなり怖い人物だったようであるがアラビアン・ナイトでは好人物となっている。

ただ実績はあまりなかったようだ(^_^)。息子のマームーンは特に名君として有名で、初めてピラミッドに穴を開けたのもマームーンなんだよ（第三百九十八夜）

ハールーンのお伴はマスルールとジャアファルである。

ジャアファルは父のヤフヤーと共に大臣職？らしい。男前で気前が良く、ハールーンはジャアファルの首にかけて誓いを立てるほど仲が良かった、といわれる。兄のファドルはとても好人物だったようだがアラビアン・ナイトには出てこなかったと思う？（弟もいるらしい）

ジャアファルは37歳のときハールーンの心変わりにより斬首、一族は滅ぼされる。当時の実権は事実上バルマク家が握っていたのでそれが原因ともいわれるが、その他にも説があり、歴史上の " **なぜ** " である。

特選 09

「商人と金細工師と銅細工師を営むふたりの息子、および金細工師の息子ハサンとペルシア人の詐欺師にまつわる物語」

第七百七十九夜 15巻

一般に「バスラのハサン」として有名な話。アラビアン・ナイトの要素がたっぷり入っていて私の好きな話。だれか映画にでもしてくれないかなあ。ストーリーは「逃げた女房子供を探しに行く話」なのだが(^_^)。

錬金術師がハサンを連れ出すが実はマジ教徒でハサンを宝石の山に置き去りに。

魔王の王女である7人姉妹に助けられマジ教徒を討つことができる。

そして、魔王の末娘はハサンと兄妹になる（勝手に?）。

天の羽衣を着て飛来した魔王の大王の王女に一目ぼれする。

ハサンは羽衣を隠して魔王の大王の王女と結婚する。

ハサンの妻となった魔王の大王の王女は（カリフ）ハールーンのお妃のゾバイダ妃に素晴らしい芸を見せるといって隠してあった羽衣を奪い返し、私に逢いたくなったらワーク島を訪ねてくるよう言い残して飛び立つ。

ハサンは魔王の7人姉妹に助けを請い、像に乗った姉妹の伯父とその師匠の仙人の助けでワーク島へ、ワーク島は女ばかり?。魔法使いの老婆の助けでワーク島の中に入ることができる。7つ島があり、妻のいる最後の島まで7ヶ月かかる。

ハサンの妻は、実は魔王の大王の七人の姉妹の末娘で、事実を知った長女が激怒。

かぶると見えなくなる頭巾と7人の魔神を操る杖を手に入れたハサンが妻を助けに行き、魔法使いの老婆も樽に乗ってハサンを手助けする。

追ってくる魔王の大王の軍勢とハサンの7人の魔神の軍勢が戦う。

ハサンの魔神軍が勝利して、ハサンは妻子とバクダードへと帰っていく。

7がテーマなのね(^_^)。兄妹になった魔王の末娘がちょっと可愛そうです。

よくワーク島は日本だと言われているがどうでしょ・・・

特選 10 寛容な物語

特選 10

寛容な物語（短編 2 話）

「ハーティム・ウツ・ターイーの物語」

第二百七十夜 8 巻

ターイー族の詩人ハーティム。財を惜しまず、よく人を助けた。

6 世紀後半（イスラム前）、実在のアラブの偉人。

これは有名な逸話で死後の”おもてなしの話”

カラム（心のひろいこと）がアラブ人の最大の美德であり、イスラムの寛容さもこのアラブ気質が関係しているのではないだろうか。

「牧人ハンマードの話」

第四百四十四夜 5 巻

ハンマードは命を助けてもら為に、ある兄妹の話をする。面白い話をして助けてもらうのはアラビアン・ナイトではよくあることだが、この話は自分を助けてくれた兄妹を殺して略奪する残酷な話。

ハンマードはこの話を面白いだろうと言っている、と言うことは略奪するのは男なら当然というアラブの習慣があるからだろうか？残忍なハンマードを助ける兄妹の寛容さ（カラム）はあきらかにアラブ（イスラム？）の美德ですね。もちろんハンマードはこの話が終わるころには首が転げ落ちている。

どんなに悪い敵でも衣の裾を握って助けを請われたら、どんなことがあっても助けなければならない。アラブの掟です(^-^)

特選 11 イブン・バットウータ

特選 11

イブン・バットウータ

大旅行記を書いた旅行家。アラビアン・ナイトとは関係ないですが (^_^)

1304 - 1377 (西暦) モロッコ生まれ。21歳で最初のメッカの巡礼に出発エジプト、シリア、イラク、イラン、アラビア、を通過してメッカに滞在。その後、イエメン、トルコ、コンスタンティノープル(ローマ帝国の首都)、インド(法官になり滞在)、スマトラ、中国、南ロシア、小アジア、アフガニスタン、アンダルス(グラナダ)、スーダン、アフリカの海岸などなど、を踏破して1353年帰国。旅行記にまとめたもの。

有名なマルコ・ポーロの東方見聞録より1世紀の後ではあるが、マルコ・ポーロは冒険であり内容も誇張されているのに対して、はるかに多くの世界を見て回っていて内容に資料価値がある。らしい、私はまだ読んでいないのです (T_T)。

大事なのは冒険ではなくて旅行である点。イスラム世界をこの目で見てみたいという**壮大な旅行**である。イスラムの国はメッカに巡礼する人を保護しているから、商人も旅人もその行路を使えばイスラムの国を安全に往来できたのです。

イスラム世界の**公共施設**(学校、病院、隊商宿、風呂、モスク)は公共基金(ワクフ)で成り立っていて充実している。つまり当時の公共施設は**民営**なのね、イスラムの都市には市長や市役所が無くてよかったのですって (^_^)。

アラビアン・ナイトの話の中で、人々がかなりの距離を移動しているのもこのイスラムのシステムがあるからなんですね。

特選 12

「三つの林檎の物語」

第二十夜 2巻

ジャアファルが悲惨な事件のきっかけを作った自分の奴隷を許してもらうため「大臣ヌールツ・ディーンとシャムスツ・ディーン」の話をする。

イスラムの奴隷制を知らないと、

なぜ奴隷が許されるのかがわからないですよね (^_^)

奴隷は自立していないので、主人は奴隷の過失を許すぐらいの度量が求められるということらしいです。ちなみに解放奴隷とは賃金をもらっている奴隷のこと。主人の後を継ぐこともあるそうです。

日本の古い制度でいうと、住み込みの使用人、通いの使用人、のれん分け、みたいな感じでしょうか (^_^) もちろん虐待されることはないです。

イスラムでは奴隷は主人と同じものを着て、同じものを食べて、役に立たなければ新しい主人に売ること、虐待してはならない。そして、奴隷を開放すれば、かならず天国の扉が開かれる。となっています。

この物語の事件でハールーンがジャアファルに犯人を捕まえないと代わりに処刑するぞと言って、ホントに処刑しようとしている (^_^) にもかかわらず、犯人が奴隷とわかると大笑いしている。

アラビアン・ナイトには奴隷がよくでてくるので、欧米の奴隷をイメージしないように、気をつけないといけないですよ (^_^)。

特選 13

「大臣ヌールツ・ディーンとシャムスツ・ディーン」

第二十一夜 2巻

兄弟の大臣が自分たちに子供ができれば結婚させようと決めるが、結婚金でもめてしまい、弟が出ていってしまう。しかし、希望通りに子供が生まれ、魔神の手引きで子供同士が結婚式で初夜を迎えて身ごもる。が再び魔神が引き離してしまう。その時の子供が親である弟の大臣の子を探しに旅に出る。当時の結婚式の様子、華やかさを伝えている。魔神が出て来ることで不思議な物語になっています。

イスラムの結婚制度を知らないと、

なぜ婚約金でもめるのかがわからないですよね (^_^)

婚約金（マハル）、日本でいう結納金？であるが妻の財産であり特に離婚した時の妻の慰謝料のかわりになるので少ないと結婚できません。アラビアン・ナイトでは、よく妻のことを”叔父の娘”と呼んでいるが実際に同じ部族の親戚どうしの結婚が多らしい。部族が違くと結婚するのは難しい、が、その時は高額のマハルを支払うのです。（アラジンもこのケース）

イスラムでは結婚は契約なので離婚も出来るのですが、離婚は良いことではないので簡単に出来ないように、三重離婚という制度（今はないの？）があります。アラビアン・ナイトにはこれを扱った話がいくつかあっておもしろいですよ。

結婚は契約であるから契約書を作るだけで結婚式はほとんど披露宴みたいなもので、非常に華やかにしていたのがこの話でわかりますね。ですから当然、イスラムの結婚では永遠の愛を誓ったりはしません (^_^;

特選 14 マルドリユス版より

特選 14

千一夜物語より

原典に入っていない話。

マルドリユス版（千一夜物語）からこの二つは気に入っているので紹介します。

「処女の鏡の驚くべき物語」マルドリユス訳 720夜

ダイヤの像と処女の娘を交換する話。

そんなに処女がいいのか？とってしまう(^_^)

それでいて処女っていないのね(T_T)

処女かどうか？がわかる「魔法の鏡」って、アラビアン・ナイトらしいようで、ちがうんじゃないの・・・

マルドリユスさんどっから訳したのかしら??

「薔薇の微笑みのファリザード」マルドリユス訳 774夜

髪の毛の片側が金色、片側が銀色の少女ファリザード、

歌う木や喋る鳥、黄金色の水を求めて、山に冒険に行く。

これはグリム童話だといっても疑われないのではないのでしょうか、

良いファンタジーだと思います。

めでたし、めでたし、(^_^)

特選 15

「カリフ、アル・ムタワッキルとアル・ファトフ・ブヌ・ハーカーンとの話
美男と美女との優劣についてある女流学者が論争した話」

(またはハマーの町の女説教師の話)

第四百二十夜 10巻

イスラムの女性は男性の半分の権利を持っていることになっている。イスラム以前はほとんど権利をもっていなかったので評価する人と、半分しかないので批判する人とに分かれるが、イスラムでは女性の特権も多くあるのでバランスはとれているのでしょう。「天国(来世)にはフリー(天国の処女)や、サルサビール(酔わないビール)があつていいところだぞ、じゃあ女性はどうなんだ、ここ(現世)が天国じゃないか」という笑い話があるぐらいですから(^_^)

アラビアン・ナイトにも女性が活躍する話はいくつかあります。たいていは男前だが何もしない主人公と美しく強いヒロインが大活躍というパターンでしてね。では当時の人はどう見ていたのか?はこの話がヒントになるのかも?ただしオチが下品で・・・(^_^)

女性の特権はいろいろありますがハーレムは女性を守るために主人以外の男性が入れない部屋を確保しなさいよと、いう意味です。また正妻は四人まで認められていますが平等に愛することが条件ですから、そのため各自に一部屋以上を用意しなければいけませんね。一般に広まったハーレムのイメージである主人がたくさん女性に囲まれているということはかなりの誇張か希望(^_^)で本来のイスラムではありえないです。また、女性は外へ出られないのではなく、危険なので外へは出る時は護衛をつけろということでしょう。ただしこれらは商人などの一部の裕福層の話であつたと私は推測しています。アラビアン・ナイトはそういった当時の人々の生活の様子がわかるところも面白いと思います。ただし、当時大半を占めていた農民の物語がほとんど出てこないことから正確ではないようですが・・・。

特選 16 バグダードの恋物語

特選 16

バグダードの恋物語

「ヌールッ・ディーン・アリーとアニースッ・ジャリースの物語」

第三十五夜 3巻

「狂恋の奴隸ガーニム・イブン・アイユーブの物語」

(または商人アイユーブとその息子ガーニムおよびその娘フィットナの物語)

第三十九夜 3巻

「アリー・ビン・バッカールとシャムス・ウン・ナハールとの物語」

第一百五十四夜 6巻

いずれもカリフ、ハールーン・アル・ラシードが治める時代のバグダードが舞台

「ヌールッ・ディーン・アリーとアニースッ・ジャリースの物語」

「狂恋の奴隸ガーニム・イブン・アイユーブの物語」

この2つの物語は最後にカリフのおかげで幸せになる喜劇。

「アリー・ビン・バッカールとシャムス・ウン・ナハールとの物語」

はカリフに恐れおののく悲劇である。

「アリー・ビン・バッカールとシャムス・ウン・ナハールとの物語」は私の好きな話です。この悲劇のポイントは影の主演カリフの影響の大きさです。

カリフ、ハールーン・アル・ラシードは好人物としてアラビアン・ナイトではおなじみですが、この物語を読むときはカリフは生殺与奪の権限があり非常に恐れられていた！ということを知って下さいね。盗賊が誘拐した二人をカリフを怖れて送り返すほど(^_^)なんです。もちろんこの物語でもハールーンは好人物として登場しています。が、しかし、実際に好人物ならこのような悲劇は生まれないのでは？本当はとっても怖くて恐ろしい存在であることをこの物語を読むとき”だけ”思い出しましょう(^_^)。

特選 17 おとぎ話と昔話

特選 17

おとぎ話とむかし話

おとぎ話はペルシャ起源の王や王子が活躍する話。むかし話はバスラやバクダードの商人にカリフがからんでいる話などです。この二つのパターンがアラビアン・ナイトで一緒になっていますが、かなりの違いがあります。一番の違いは、むかし話の時代は**イスラム世界**であるということです。

イスラムの社会システムは自由に移動できて商売が出来ること、つまりイスラム法が行き届いていることで国民、国境という概念は薄いと思います。アラブ人はもともと遊牧民で移動しますからね。(移動できない農民は話の中にもほとんど出てこないが実は半数を占めて当時最先端の農業をしていた)

国(当時は城壁都市)とは、無理やり例えると(^_^)、時代劇に出てくるような”やくざ”の縄張りでしょうか(^_^) つまり、支配者の王様が親分さんで役人の奴隷は子分ですね。奴隷身分である子分が跡目を継いでゆくゆくは王様になるのです。戦争はやくざの縄張り争いですから住民は関係ありません。イスラム教徒は人を傷つけてはいけませんし奴隷にもなれませんから。つまり、イスラム教徒は誰かの支配者にはなれませんね。したがって支配者は非イスラムの奴隷たち。やくざの親分を市民が選挙で選ぶなんてありえませんよね、イスラム社会では自分の支配者を選ぶ選挙なんてしないのです。それで、国は成り立つのかといえば、イスラム法が税金から何からすべて決まっていますから問題ないのですね。イスラム法と違うことをすればイスラム教徒が反対します。イスラム教徒は人を傷つけてはいけません、聖戦は義務ですから(^_^)。また、正しくイスラム法を守っている親分のいる国に行けばよいのです。移動できるのですからね。**イスラム世界は国を選べる国際社会?**だったかも(^_^)。アラビアン・ナイトのむかし話の人達の目標は商人になって世界中と貿易して大富豪になることなんです。シンドバードのようにね。そうそう彼らは用心棒代は取ります(^_^)などと、考えてみるのはどうかな(^_^)

特選 18 日本とイスラムは似ている？

特選 18

日本とイスラムは似ている？

私はアラビアン・ナイトを読みながら、江戸時代とイスラム世界が似ているような気がしています。時代劇とちがい実際の江戸時代は戦争が無く商売が盛んで、大坂では先物取引が世界初だったりと、国内と世界の違いはありますが共に繁栄していた・・・ようですから(^_^)

イスラムは今は宗教ですから願い事を祈ったりします。しかしアラビアン・ナイトの話からわかるように当時、アッラー（神）は恐れられていて、願い事は叶えません。天国と地獄は本来イスラム特有の概念で、現世で良いことをすれば、来世で報われる、つまり良いことをしないといけないので、法律を守ろうとなるのですね。そこで、イスラム法学者が重要になります。

それまでの願いを叶える宗教、イスラムの願いを叶えない神、つまりイスラム法学者による法律による政治がアラビアン・ナイト時代のイスラム世界かな(^_^)

では日本はどうでしょう、聖徳太子以来日本は仏教？(^_^)の政治です。宝くじが当たりますようにと神様にお願いをして、お坊さんに「まじめに働け」と諭されるのです。神社仏閣というぐらいで一緒に建てたりしますからね(^_^)。むかしのお坊さんは今の役人、政治家にあたるそうですし・・・

江戸時代は、願いを叶える神と叶えない仏そして、規範はなぜか儒教の学者ですが、法律による政治をしていた。

うーん、この説はムリが・・・(^_^)

調べていて驚いた、ムハンマド（モハメッド）と聖徳太子は年代が一緒なんだ・・・

特選 19 ほくろのアラディン

特選 19

ほくろのアラディン

「アラッ・ディーン・アブツ・シャーマートの物語」

(ほくろのアラディン物語)

第二百五十夜 7巻

三人の妻 (イスラムでは正妻は四人まで) を娶る男の物語

ホクロは美男の象徴 (^_^)

1番目の妻はウード (琵琶) の名手**ズバイダ**

イスラムでは「別れる」と言えばそれで離婚できる。しかし、簡単に復縁できる。ただし、三回まで (^_^)。三度目は本当の離婚になるので、復縁できない。それでも復縁したいときは、妻が一度他人と結婚して、それから離婚するとまた結婚することができる。4度目に復縁をしたいときはこの役を誰かに頼むことになるのだが、これをアラッ・ディーンは頼まれるがそのまま離婚せずにズバイダと一緒にいる。ただしその後、病死 (^_^)

2番目の妻は女奴隷**ヤーサミン** (ジャスミン、奴隷の一般的な名)

ヤーサミンは教養と美貌がある高価な女奴隷。かの女をめぐって話が続く。また、カリフの女奴隷クートル・クルーブは「狂恋の奴隷ガーニム・イブン・アイユーブの物語」にも出てくるので、たぶん同一人物 (^_^)

3番目の妻は魔法使いの**マリアム** (マリア) 姫

無理やりハッピーエンドにしようとしたのか？死んだはずのズバイダが生きていて・・・空飛ぶ長イス、最強の騎士など、魔法を使う姫。話に凄く**ムリ**があっっておもしろい (^_^)

邪視を怖れて地下室で育てたり、カリフの寵愛で出世したりと**アラビアン・ナイト**ならではのストーリーである。

空飛ぶ絨毯は・・・

ほくろのアラッディンの物語で空を飛ぶ長椅子ができましたね。しかし、不思議なことにあの有名な「空飛ぶ絨毯」は、原典完訳版のアラビアン・ナイトには出てきません。ソロモンの大絨毯の話があったのはなんとか覚えているのですが(^_^)

よく知られている小型の空飛ぶ絨毯が出てくる話はなかったはず。アラビアン・ナイトでは、たいてい空を飛ぶのは魔神の力を借りてです。

「黒檀の馬の物語」は機械仕掛けの馬が空を飛ぶのですが、腹が膨らんで上昇するとありますから、構造はたぶん気球ではないかと私は思いましたよ(^_^)

まえ

マルドリユス版（千一夜物語）には・・・

「パイバスル王と警察隊長達の物語、第八」949夜
魔法の絨毯が出てきます。

「ヌレンナハール姫と美しい魔女の物語」807夜
物語は三兄弟が三つの宝を探しに行くのですが・・・
その一つが魔法の絨毯でした。

- ちなみに三つの宝とは
- 移動する絨毯
 - どんな病気をも治す林檎
 - 何でも見える望遠鏡。

つぎ

[ホームへ](#)

おはよう、千一夜

特選 21 葡萄姫

特選 21

「カマル・ウツ・ザマーン物語」

(またはシャハリマーン王とその子カマル・ウツ・ザマーンとの物語)

第七十一夜 6巻

「葡萄姫」という天野喜孝の絵本(3900円)も講談社から出ています。

とても人気がある物語。 葡萄姫はブドゥール姫のこと(^^ゞ

起承転結

カマル・ウツ・ザマーン王子は父王からの結婚の勧めを拒んでいました。そのために古い塔に幽閉されていたのです。

この塔にはマイムーナという女の魔神が棲んでいて、古井戸からでてきた魔神は王子の美貌に感心していると、そこへ魔神の韋駄天ダハナシュが通りかかりました。マイナムがカマル・ウツ・ザマーンの美貌を自慢しますと、ダハナシュは遠い国のブドゥール姫のほうが美しいといました。

そこで、マイナムはダハナシュにブドゥール姫を運ばせ、**魔神たちは二人を比べました**。なんと驚いたことに、二人の顔、容姿はそっくりで、またどちらも美しく・・・実はブドゥール姫もまた男嫌いで結婚を断っていたのですが、カマル・ウツ・ザマーンとブドゥール姫は互いに愛してしまいました。しかし、魔神がブドゥール姫をもとの国へ戻したため、二人は離ればなれに・・・

マルザワーン手引きでカマル・ウツ・ザマーンが姫の国へたどり着き・・・そして、二人は再会して結ばれました。

魔神が二人を比べる場面が**最高**に好い。アラビアン・ナイト史上、最高の名場面でしょう(^-^)。本来この話は、この再会までで終わっていたと言われるが、私もそう思います。

特選 22

続「カマル・ウツ・ザマーン物語」

起承転結

カマル・ウツ・ザマーンとブドゥール姫はめでたく結婚しました。

しばらくして、カマル・ウツ・ザマーンは国に帰る為に姫と出発することに。

ところが、途中でカマル・ウツ・ザマーンは迷子に・・・

家来と取り残されたブドゥール姫はしかたなく、カマル・ウツ・ザマーンに男装して旅を続けて・・・

ひょんなことからハヤート・ウン・ヌフース姫を嫁にもらうことに・・・

そして、その国の王様になりました。

そこに、カマル・ウツ・ザマーンが苦難の末たどり着き・・・

男装のブドゥール姫がカマル・ウツ・ザマーンをからかう(^_^)

結局、カマル・ウツ・ザマーンはブドゥール姫と、ハヤート・ウン・ヌフース姫の二人を妻にしました。

再会まではかなり古い物語なのだが、この話はあとから付け加えたもの??

ブドゥール姫は美人だが気性がとっても激しい・・・

恋に落ちたブドゥール姫は侍女を殺しています。(侍女はバートン版でも死亡。しかし、マルドリユス版は未遂。) そのあと鎖につながれることになりましたが、その鎖もカマル・ウツ・ザマーンとの再会の時に引きちぎっている(^_^)

二人はそっくりなのですから、実はブドゥール姫は男前?

これでは、カマル・ウツ・ザマーンがかわいそうなので、ハヤート・ウン・ヌフース姫を二人目の妻にするためにこの話が付け加えられたのかも?

正妻を四人まで娶れるイスラムならではですねえ(^_^)

特選 23

続々「カマル・ウツ・ザマーンの話」

起承転結

マルドリユス版はこの先を訳していないが

二人の妻の子供の話がつづいている・・・

ただし、枠物語の要素が大きいのではなだろうか？

「アル・アムジャドと女とそしてバハラームとの話」

第二百三十一夜

性悪な女の話

「ニイマ・ビン・アル・ラビーとその女奴隷ヌウムとの物語」

第二百三十八夜

バクダードの恋物語と同じストーリー展開の話。

などが挿話として入っています。

起承転結

アラビアン・ナイトではよくあるパターンのハッピーエンドです。

なぜかそれまでの出演者が一同に集まって一気に解決します(^_^)

ただし二人の妻とは別れ(離婚?)で終わっています。

この素晴らしい出逢いの物語の最後が離婚ではねえ

(注) そう解釈しました(^_^)

イスラムは離婚できますからやはりイスラム的ですけど・・・

特選 24 優しいイスラム

特選 24

弱者に優しいイスラム。

「アッラーを恐れよ、アッラーの手からは逃れられない」アラビアン・ナイトを読んでいるとこの言葉が何度もでてきますね。一神教のイスラムでは病気、障害、そして、死、どれも神が与えるものです。イスラムでは生き方が大事で、それによって死後、天国か地獄かがきまるのです。

アラビアン・ナイトを読み始めるといきなり障害を持つ人達の滑稽話などがありますがそこに差別はないのでしょう。

「荷担ぎやと三人の娘の話」1巻の三人の遊行僧の話で

特に「第三の遊行僧の話」はオススメです。

また、「せむしの物語」2巻は必ず読んでね(^_^)

天国に行くためにはどうすればいいか・・・

人間の両肩には天使が乗っています（どちらも天使ですよ）片方の天使が善行を、片方の天使が悪行をすべて記録していて、それらの記録から最後の審判で天国か地獄かが決まります。ですからイスラム教徒は、乞食に施しをする，公共施設など社会に奉仕する，奴隷を解放する，などで善行を積むのでしょう。

アラビアン・ナイトでも乞食に施しを与える場面が多く出てきます。

それも、かなりしつこく出てきます(^_^)

当時は本当にしていたのか、それとも、していないからしるって意味かな？

”偽”修行僧に簡単に騙される話があるところからすると、実は・・・

特選 25

聖戦 天国に行けます。

イスラムではムスリム（イスラム教徒）は人を傷つけてはいけなくなっています。ところが、聖戦もムスリムにとっては義務です。しかし、聖戦とはイスラム世界を守るための戦いであり、昔のイスラム世界は法治システムですから、国や民族や宗教といった自分のエゴのためではなく、社会全体が無法地帯にならないようにするためなのです。

最近は何でも聖戦と呼ばれるようですが？イスラムでは死からは逃れられませんからね、自衛の為の戦いは正当防衛でも、聖戦とはならないのでは？

では聖戦とは、

サラディンが十字軍を追い返したのがそうです。最近では十字軍が一方的に悪かったことがわかっています。ただ、侵略や戦争が問題なのではなくて、侵攻後の政治、統治が下手だった。当時はイスラム世界が発達した先進地域です、後進のヨーロッパはまだ野蛮ですので、十字軍たちはまともな政治ができずに、住民の宗教が違うというだけで皆殺し（^^ゞ 結局、追い出しちまえとなったのでした。

イスラムではユダヤ教徒やキリスト教徒は同じ神を信じる兄弟なのです。アラビアン・ナイトの話の中で、ナザレ人（キリスト教徒）が悪人になっているのは十字軍時代以降に書かれた話でしょうか。

ヨーロッパの影響で今のアラブには国境がたくさん出来ました・・・

ところがイスラムの影響を受けたヨーロッパはEU統合で国境を無くそうとしています。ですからアラビアン・ナイトのイメージは今のアラブより今のヨーロッパに近いかも知れませんね。

優しい弟の物語

「商人ウマルと三人の息子、サーリムとサリームとジャウダルの物語」

第六百七夜 13巻

魔法の革袋からどんな料理もでてくる(^_^)

アラビアン・ナイトらしいファンタジーで好き。

ジャウダルが魔法使いのおかげで王になる成功話。

だが、悪い二人の兄にずっとうといじめられる(^^)

しかし、ジャウダルは二人の兄と優しく接する。

そして、最後は毒殺される・・・

とってもアラブ的な寛容さがある物語だ。

まえ

アラジンと魔法のランプと、似ているのに、まったく違う(^_^)

つぎ

”天球儀と目薬入れと指輪と剣”

- アッラアド・カーシフ (破壊雷電) という名の妖怪が召使いになっている指輪。
- 火のような閃光がきらめき全軍を破滅する剣
- どんな地域も見ることが出来る天球儀
- 大地の宝物を見透かすことが出来る目薬

[ホームへ](#)

おはよう、千一夜

特選 27

「アジーズとアジーザの話」

第百十三夜 5巻

アラビアン・ナイトは詩が多いのが特徴ですが、私は詩が苦手(^_^ゞでもこの物語の詩は良い効果(情)を出してるので好きです。

アジーズは男前だけが取り柄の哀れな男。

好かれた女になぜか殺されそうになる。

しかし、いいなずけの聡明な従妹アジーザに助けられる。

愛するアジーズの為に献身的に尽くしてアジーザは亡くなり、それを知った女は男を立てて逢瀬を楽しむが・・・

世間知らずのアジーズは他の悪女にだまされて、屋敷に連れ込まれて無理やり結婚させられる。

1年後、前の女の所へもどって見ると、女は1年間、同じように待っていた。

他の女に騙されて結婚したことを話すと・・・女は怒りに燃えて男を殺そうとする。だが、亡くなったアジーザの二句の言葉を思い出し思いとどまると・・・

代わりに男の大事なところを切りとって・・・アジーズを放り出す。

結婚した女もアジーズが去勢され役に立たなくなったのをみて見捨ててしまい、

アジーズは初めて亡くなった従妹アジーザの愛情を知る。

二句の言葉の訳(^_^)

原典完訳版 「一心は美しく、二心は醜し」

バートン版 「誠意は正しく、不誠意は邪まなり」

マルドリユス版 「いかばかり死は快く、裏切りにまさるものぞ」

特選 28

ベール

ベールは砂ぼこりや紫外線。そして邪視からプライバシーを守るため。また、女性は他人に顔や肌を見せてはいけないというアラブの風習、習慣。それは、イスラム教に取り入れられてイスラム法へ、ただコーラン（アンクルアーン）をどう拡大解釈しても”服を着ろ”らしいのですが (^_> アラビアン・ナイトでも「儀式用のちいちゃなベールを着ける」と出てくる所もあって、もしかしたら、かなり露出していたのでは (^_^) そうそう仮面舞踏会はベールのなごりだとか (^_> 女性はベール越しに男性をいくらでも見ることができるが。男性は女性と出逢いがないので仲立ちをする人が必要ですね。だからアラビアン・ナイトには良く出てくるのですね。世話焼きの”やり手ババア”が (^_>

ところでムスリム（イスラム教徒）にとって、女性は他人に顔や肌を見せてはいけない。ということは、**男性は他人の女を見てはいけない！**ということですね。もし見てしまうとイスラム法は戒律ですから天国に行けなくなってしまいます。しかも、アラビアン・ナイトでは美しい女奴隷がいっぱいで・・イスラム教徒は奴隷にできないから、つまり**奴隷は異教徒、顔や肌を露出しています！！**美しい女奴隷は見たいが、でも見てはいけない。そこで、不意に出合って見てしまわないように、鈴を付けました (^_^)

” アンクレット”

足首に着ける飾り、女奴隷を飾る

” アンクレット” しゃなりしゃなりと音を立てる

” アンクレット”

足首に着ける飾り、女奴隷を飾る

” アンクレット”

アラビアン・ナイトには、見てはいけないのに・・・見てしまって・・・恋に落ちる話がたくさん出てきますが、当時の人たちにとってこの展開は、**実はかなりショッキングな話なのかな・・・**

特選 29

「人魚」

「ホラサーンのシャフルマン王の物語」

第七百三十九夜 15巻

アラビアン・ナイト版”人魚姫”の話、と言っても、足があるが(^_^)

海のジュルナールがシャフルマン王に買い取られて王妃になり、王の後を継いだ息子の冒険。ただ全体的に、あらすじを読んでいるような感じがする(^_^)、もっと脚色しないとオモシロくないぞ(^_^)

だいたい海底人は海の中を自由に歩いているだけで、海の底の不思議さが伝わらない。当時は講釈師がそのつど脚色していたのか、それとも、わざわざ言わなくても共通のイメージがあるのか？当時の聴衆は海から来たジュルナールが珍しくはないらしい。

この話、後半でジュルナールは実は魔法使いで、魔神族を操って空を飛び悪い魔女をやっつけてる。よく考えるとかなり、**はじけた物語**です(^_^)

もう一つ海の人物語

「陸のアブド・アッラーフと海のアブド・アッラーフの物語」

第九百四十一夜 18巻

同姓同名の地上の人と海の人との交流、友情の話だが・・・

最後は**理解しあえずに絶交**してしまう物語。

特選 30

不思議なイスラム

1、国がない？

イスラムでは人は「神の下に平等」ですから信仰や民族や人種による差はない、したがって支配者によるイスラム政治は、都市の治安維持をしているにすぎないのか？実際に為政者は征服したあとでイスラム法学者を呼び寄せている。ということで、シルクロードとはイスラムを通じてアラブの商人がアジアの物資を西欧に高く (^_^) 売りつけていた証？

2、布教しない？

信仰は自ら進んでするものです。イスラム教徒（ムスリム）は「神（アッラー）の他に神なし、ムハンマドは神の使徒なり」と信仰告白（シャハーダ）をしなければなりません。他人に強制されたらイスラムにならないのです。ただし、ムスリムの為 (^_^) お祈りの呼びかけ「アザーン」をします。「ムアッズィン」（呼びかけ人）は宗教に関係なく登用することも。

3、叶えない？

「神を恐れよ」とか「神は偉大なり」あるように、イスラムの神様（アッラー）は最強の神です。人間より偉いのですから、人間の願いなんてイチイチ聞きません。ということは、お願いはごとは他の神様をお願いしていた？アラビアン・ナイトの物語では、占いもしています。魔法使いに魔神、修業僧なども出てきます。しかし、イスラム教には僧や神父や坊さんに当るものはダメ。イスラムでは信仰は自由、風習や習慣も尊重しますからね (^_^)

特選 31 アジープとガリーブ

特選 31

「クンダミル王の子アジープとガリーブの物語」

第六百二十五夜 13巻

この物語は長い物語で、登場人物も多くてややわかりづらい。

しかし、とにかく相手をやっつける単純な物語。

途中から魔神もでてきますし、ほんと無茶苦茶な話です(^_^)

ある意味(^_^ゞ とってもオモシロイ。

相手をやっつけるだけでは寛容なアラブでは受けないので？、頻繁にイスラムへの改宗を迫っています。これは物語の時代設定がかなり古くて、イスラム以前になっている為だそうで、信仰告白の言葉もわざと変えています。改宗すれば許そうと言うことになるのね？。もちろんイスラム教が強引に改宗を迫ることはないのですよ、だって実際は、かれらの自治区を作って人頭税を取っていたのですから。

食人族のサーダーンが人を食う？。本当は威嚇のための芝居？

最新兵器登場と言っても鉄砲だけだね。後世の付け足し？

バートンは注釈でインド軍の麒麟は戦いに向かないと気にしている。でもこれってもしかして、伝説上の麒麟のことなんじゃないかな？ 対する主人公のガリーブは妖怪二人を従えて海馬に乗り名刀アルマーヒク（破壊者）を携えて戦っているのだが、手持ちの辞書によると海馬とはセイウチ、トド、タツノオトシゴの別称でしたが(^_^ゞ

この物語は他のヨーロッパの訳者は訳さないものらしい。マルドリユス博士も訳していない。しかし、さすがアラブ通、バートンは訳しています。

特選 32 神の名において

特選 32

神の名において

知らずに旅の商人が魔神の子供を死なせてしまう。親の魔神がその商人を殺そうとしたとき、商人は身支度をするので神に誓って戻ってくるから一度帰らせて欲しいと懇願する。約束通りに戻ってきた商人は三人の長老に出逢い、長老達は商人を助ける為に魔神に珍しい物語を・・・第一夜より・・・

アラビアン・ナイトでは、「神に誓う」以外にもいろんな物に掛けて誓います。たいていは「自分の頭の上(ターバン)」?や「目の上」?に掛けて誓うのですが、中には「あなたの健康に掛けて誓う」って(^_^)、守れなかったら殴るぞってこと?もしかしてここは笑うところなのだろうか?

もし守れなかったらどうなるのかって、大変なことになるでしょう。神様にうそはつけませんからね。そのために普通は「神の思し召し」と最後に必ず言います。つまり「誓って約束するよ」けれど「神がそれを望んでいけばね?」ってこと(^_^)

でも実はただの普通の習慣なのかも、「あなたに平安がありますように」(アッ=サラーム・アライクム)が「こんにちは」の挨拶で、「神の思し召し」(インシャラー)が「さようなら」なのでしょう。ちなみに文章の時は「神の名において」で始まります。

ただ、神様に名前は無いのですが(^_^) 「神」はアラビア語で「ラー」、「様」のような丁寧語は「アル」ですから、「アル・ラー」「アッラー」となります。でもね名詞なので「アッラーの神」でもいいみたい?。神様と呼ぶのも失礼に当るので別称が99もあります。それでは、**インシャラー**

特選 33

歴史上実在した人、その2

私はイスラム世界、千年の繁栄はアラビアン・ナイトを読むまで知りませんでした。今でもアラブ、中東の文化はほとんどわかりません、同じアジアなんですけどね(^^ゞ。今まで集めた資料を見てもアラビア語ですら見ることができるのは一冊だけです、本屋をまわってもアラブ関係はなかなか置いていないものです。そこで、アラビアン・ナイトに出てくる実在の有名人を挙げてみました。

音楽家、モースルのイスハーク

(イスハーク・ウル・マウシリー、西暦767-850)

音楽の大家である父イブラーヒーム・ウル・マウシリー後を継いでアッバース朝の宮廷の音楽の主任で、実際にカリフ、ハールーン・アル・ラシードやバルマク家、アル・マームーンなどに愛護された。アラビアン・ナイトには父のイブラーヒームの話もある。

「モースルのイスハークの話」

第二百八十夜 8巻

「モースルのイスハークと商人との話」

第四百八夜 10巻

「アブー・イスハーク・イブラーヒーム・アルマウシリーと悪魔アブー・ムッラの物語」

第六百八十八夜 14巻

「イスハーク・アルマウシリーと奴隷娘と盲人（悪魔）の物語」

第六百九十六夜 14巻

「イブラーヒーム・ブヌ・イスハークと若者の物語」

第六百九十七夜 14巻

特選 34 歴史上の人物、その3

特選 34

歴史上実在した人、その3

アラブの大詩人、アブー・ヌワース（八世紀）

遊牧アラブ人と暮らし純粋のアラビア語を学ぶ、宮廷詩人となるべくバグダードへ、バルマク家に才能を認められるが、バルマク家没落後はカリフ、アル・アミーンに庇護された。飲酒の詩が有名？同性愛者？

「ハールーン・アル・ラシードとある女奴隷とアブー・ヌワースとの物語」

第三百三十九夜 9巻

「アブー・ヌワースと三人の若衆とカリフとの物語」

第三百八十二夜 9巻

イスラム法学の大家 アブー・ユースフ（西暦731－798）

バグダードの法官ハールーンの信任が厚く御用学者？と言われることも（^_^）。

「カリフ、ハールーン・アル・ラシードと女奴隷、そしてアブー・ユースフ大師の物語（またはイマーム・アブー・ユースフがどうしてカリフ、ハールーン・アル・ラシードとその大臣ジャアファルとを窮地から救い出したかという物語）」

第二百九十七夜 8巻 （実際にハールーンと従兄弟イーサー・ブヌ・ジャアファルとのあいだで起こったとされる）

「カリフ、ハールーン・アル・ラシードとズバイダ正妃との話（または法官アブー・ユースフとズバイダ正妃との話）」

第三百八十九夜 10巻

特選 35 トンネル悪女？

特選 35

トンネル悪女？

「商人アブド・アッラフマーンとその息子カマル・アッザマーンの物語」

第九百六十四夜 18巻

バスラで不思議な出来事が起きている！

前半は**おとぎ話風**で始まっているのだが・・・

後半は不倫、駆け落ち、殺害、と、なんとも**リアルな話**です。

アラビアン・ナイトの枠物語は、妻の裏切りに女性を信用できなくなった王様を物語を通して更生、つまり、女は悪女ばかりではなく、素敵な女性もいる事を証明することです。

この話は、まったくその通りで、主人公の恋した人妻は悪女の代表であり（いや、ホントは主人公に問題があるような??）その対比として最後に素敵な女性、この場合は主人公の妹が出てきます。

しかし、親の決めた相手と結婚して、相手が亡くなって未亡人になっても再婚せずに一生を過ごすことが良い女性だとは・・・

どっちも極端ではないだろうか（^^ゞ

コーヒーが出てくるのでかなり後期の作品でしょう。

特選 36

「海のシンドバッドと陸のシンドバッドとの物語」

第五百三十七夜 12巻

「シンドバッドの七つの航海の物語」第七航海の物語が二つあります (^_^)

有名な「シンドバッドの冒険」を私は知りませんが (^_^ゞ
初めて千一夜物語を読みシンドバッドの物語を知りました、普通に船に乗っていますから定期航路だと思いましたよ (^_^ゞ。商売のあいまに観光を楽しんでいますしね。シンドバッドは実はかなり大きな船にたくさんの荷物を積み込んでるようで、バスラで停泊している船に他の商人と一緒に乗り込んで航海にでるのですが、第五の航海の話ではシンドバッド自身で大きな船の船主になってます。どちらかといえば「シンドバッドの貿易」が正しいのでは・・・

当時の航海は陸地を見ながら進みます。つまり、バスラを出てインド洋をインドシナへ向かう航路とアフリカ大陸へ向かう航路で、沖にでてしまうと遭難します。シンドバッドの物語はたぶん今のインドシナあたりが話のモデルになっていると思われます。文章の細かな記述から歴史的発見がまだあるかも (^_^ゞとくにダイヤモンドなどの高価なものを手に入れるエピソードから冒険話が作られたのでしょうか。しかし、本来の物語を読み終えると第四の航海におけるシンドバッドの殺人がもっとも印象に残りましたが・・・自分が生きる為に他人を殺す話ですね。法律でいうと緊急避難てやつです。ちーとびっくり (^_^ゞ

特選 37

「商人マスルールと彼が見た夢の物語」

第八百四十六夜 16巻

ユダヤ教徒の人妻ザイヌ・アルマワーシフがキリスト教徒のマスルールと不倫する話。だが最後にイスラムに改宗するのはなぜ(^^ゞ

アラビアン・ナイトの話には異教徒が隣どうしだったり、それぞれ自治区があったり、ターバンの色が白ならイスラム、黄色ならキリスト、赤なら拝火教、となっています。当時のイスラム政治下では・・ようするに今と同じ(^_^)、一緒にいろんな信仰の人が暮らしていたわけですね。

この話は不倫ですから道徳的には大問題ですね、でも実際にはあることですから現実的な対処としては離婚できるイスラム法に・・ということかと思いたい。でも最後にユダヤ教徒もとの主人を生き埋めにしていきますよ~(^_^)

法官に訴える場面で彼女はもともとイスラム教徒だった言っています。バートン版の注釈では肯定しています。しかし、ここは嘘を付いている場面ですから、やはりもともとユダヤ教徒だと私は思いますが・・。マスルールはもとよりアルマワーシフをひとめ見た法官達や修道士達が皆、恋の病で死んでしまうとは！
いったいどんな美人なんのでしょうか？彼女への恋心をあらわしている**多くの詩を楽しみましょう**(^^ゞ
原典の関係で完訳版では省略されている部分ですが、バートン版には載っていました。マスルールがアルマワーシフにしつこくセマッテます(^_^)

特選 38

二つの伝説

「アブドラー・ブム・アビー・キラーバの物語」（またはアブドラー・ブム・アビー・キラーバと円柱の都イラムの物語）

第二百七十六夜 8巻

「黄銅城の物語」

第五百六十七夜 12巻

円柱の多い都イラムはアード大王の子シャッタードが建てた伝説の都の話。完成した豪華絢爛な都に遷都すべく赴くが神の怒りを受けて一行は殲滅する。実は円柱ではなくて天幕だとかギリシャの遺跡だとか説はあるが、それでは夢がない。バベルの塔と違って都その物は無傷なので・・・今も砂漠のどこかにあるのだ！！

で、その息子が作った？とされる黄銅の城と城市の話。あとがきの解説にかなりの量があり興味深い。ダビデの子ソロモンの伝説と砂漠の黄銅城の伝説が交じり合ってる話。ジン（妖精）を支配したソロモンは絨毯に大軍を載せて戦い、敵のジンを銅製のクムクム（首長瓶）に詰めて海に沈めた。この瓶を引き上げて割るとジンが謝りながら飛び去っていく。カリフがその瓶を求めて派遣した一行が途中で伝説の黄銅の城と城市を発見する。中に入って（もとの伝説では中に入れないのだが）たくさんの財宝を奪い。また目的のクムクムを持ち帰ることに成功する。

ソロモンの軍は、妖精族（ジン）、人類、獣、鳥類、爬虫類 など、で構成されていて、数もシャイターン（サタン）六億、人間界の軍勢百万以上。これらがソロモンの絨毯に乗り進軍するわけで、これが、いわゆる空飛ぶ絨毯の基になったと思うが、かなりデカイですね。

城壁の中は廃虚であり、誰もいない。長引く干ばつで皆死んでしまったのだ。どんなに権力を持っていても、財宝を持っていても、軍隊を持っていても、いつか必ず死んでしまうのだよ、神を恐れなさい。来世の為に善行を積みなさい。といった詩が多数あり。以前は気にしなかったが、今はここが大事なところですね。

特選 39

「蛇の女王の物語」（またはハーシブ・カリーム・ウツ・ディーンの物語）

第四百八十三夜 11巻

ギリシャの賢人ダニエルの息子ハーシブ・カリーム・ウツ・ディーンは何一つ学ぶことが出来ず、きこりになりました。ある日、洞窟で蜂蜜を見つけるが、きこり仲間に騙されて置き去りにされてしまいました。しかし、洞窟の奥で大蛇たちと出合います。人の顔をした蛇（くちなわ）の女王が大蛇の背中に乗せられてやって来ると、ブルーキーヤーとジャーンシャーの物語を話しました。洞窟から地上に戻ったハーシブ・カリーム・ウツ・ディーンでしたが、病気の王様を助ける為に蛇の女王を捕まえようとしている大臣に捕まってしまい、洞窟の場所を教えてしまいました。蛇の女王の忠告で大臣の罠から逃れたハーシブ・カリーム・ウツ・ディーンは蛇の女王の効能でこの世の知恵を吸収しました。同じく蛇の女王の効能で回復した王様は亡き大臣の代わりに賢人になったハーシブ・カリーム・ウツ・ディーンを大臣に取り立てました。蛇の女王は挿話のブルーキーヤーの話とジャーンシャーの話を**枠物語**です。この2話は魔神の出てくる不思議な物語。

私が古典である千一夜物語を読み始めた目的はこのブルーキーヤーの話とジャーンシャーの話です。そのときは「宇宙考古学」と呼ばれるものに興味を持っていました。古代の遺跡は宇宙人が作ったという仮説ですね。したがって神話や伝説などに出てくる神は”宇宙人”なんです(^_^)。千一夜物語も伝説、神話ですからね、探せばなにか出てくると思いましたが・・

特選 40

「ブルーキーヤーの話」(蛇の女王の物語の挿話)

第四百八十七夜 11巻

宇宙を旅する物語・・・

あとがきでも「生命(不死)の泉を探して宇宙を遍歴する話」となっていますからやっぱり宇宙なのだろうか??アラビアン・ナイトには 天使、魔神、預言者、などの登場する物語があるが、その中で一番難解な物語である。

前半はスライマーン(ソロモン)の伝説をもとにソロモンの指輪を探していくというものでこの指輪で魔神を操り世界を征服できるのです。そして暗黒の海に入り生命の泉の水を飲めば不老不死になり、最後の預言者に逢うことができる(これが目的)。しかし、首謀者のアッフアーンは指輪を外そうとして灰になってしまい天使ガブリエルに助けられたブルーキーヤーは帰りに7つの海をさまよって・・・

7つの海をわたる記述、どうもこれが7層の天空をあらわし、ようするに宇宙をあらわしていると思われま。す。「バスラのハサン」の物語でも7つの島が出てきたように7という数にはなにかあるのでしょうか？。

とにかく意味がわからない不思議な旅行記ですが・・・ということは作り話ではないということで、何かかモトになっているのでしょうか。やはり宇宙の旅なのか??

7層の天空、7層の地獄、魔神や天使のことなどなど、(索引も)アラブの伝承・神話の資料となる。物語としてはツマラナイかも知れないが、神話の研究と思えば非常に興味深いのではなかろうか・・・

特選 41 ジャーンシャー

特選 41

「ジャーンシャーの話」 (蛇の女王の物語の挿話)

第五百夜 11巻

「バスラのハサン」と同じく羽衣伝説を取り入れていて、アラビアン・ナイト的要素が多い物語だ！

真っ二つに裂けた人間が襲いかかってきたり、無理矢理”猿”の棟梁にされたり、と冒険の後・・・肉塊に入り巨大な鳥（ロック鳥）に宝石の山の頂まで運んで貰う（有名な話。たぶん宝石商が採掘場を知られないようにごまかしたんだろう）というおきまりの展開で天の羽衣伝説をもとにした本編へつなぐと、やはり・・・

”この鍵の扉は開けてはいけない”

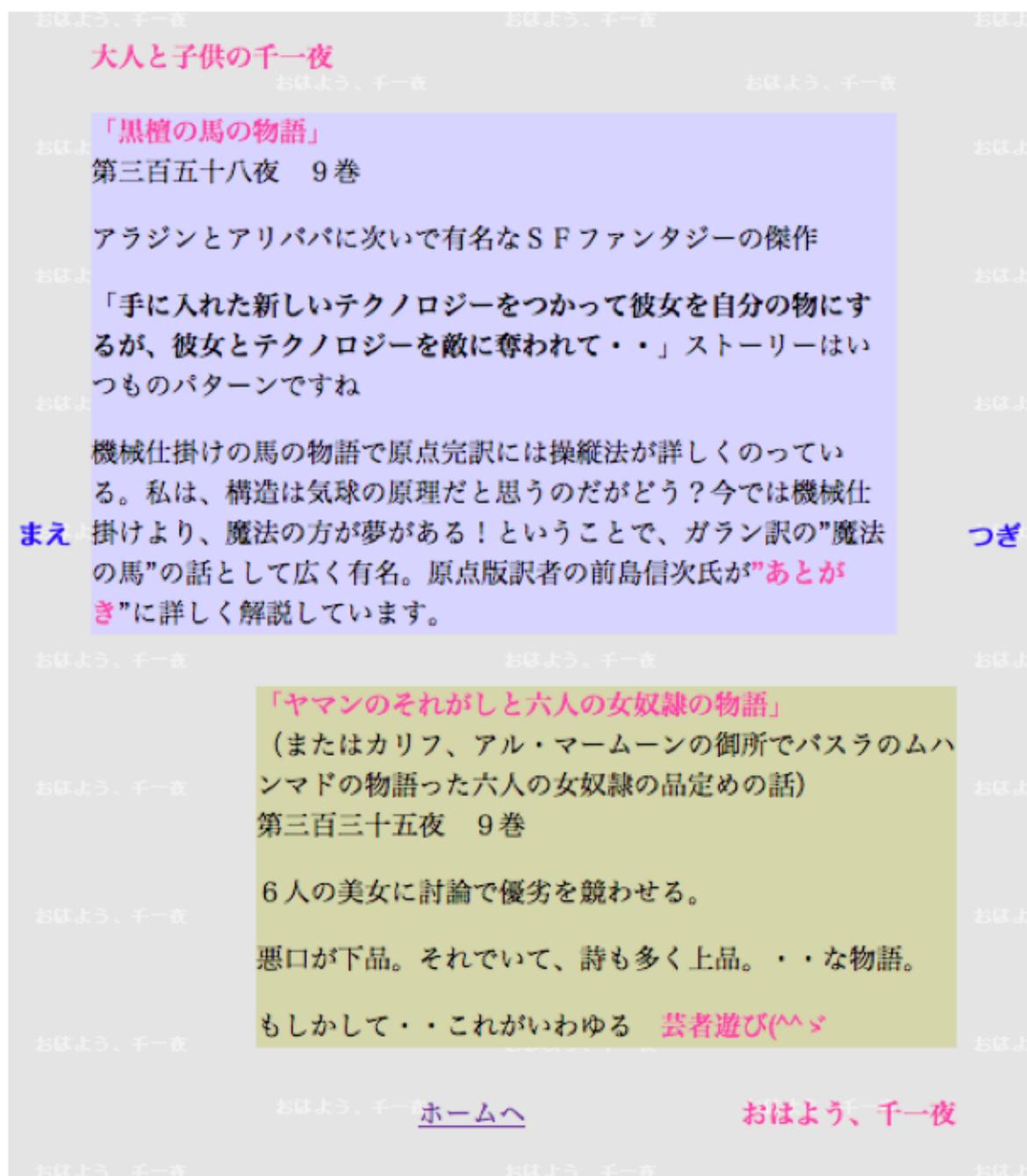
となるわけで、こう言われればどうしても開けたくなるよね(^_^) 開くと庭園があり天女が舞い降りる。一目ぼれした子の羽衣を隠して、無理矢理？結婚する！が、羽衣を取り返されて逃げられる・・・

妻を追って、追って、追って、追って、とことん探し続けて再会すると、

妻の両親は、なぜか無理矢理に結婚した夫より、逃げた娘（妻）の方がやり過ぎ？と言うことでこの縁談を祝福(^_^)

ジン族最強のマーリド軍をともなって帰国。インドとの戦争にも勝って大円団。

そして、いつまでも死んだ妻を偲んで泣き暮れるジャーンシャーであった・・・



初期の

「おはせん」はここまでです。

私の気に入った話は取りあえず載せたので、ここで放置してしまいました。

新しい「おはせん」



これが新しく作り直したホームページの表紙ともくじです。前のよりはオシャレでしょ (笑)
2009年から作り、ちょっとずつ更新はしていたんですが、Appleの公開サービスが終了してしまったので今はありません。あまりアクセスも無かったので知っている人はいないんじゃないかなあ。また新しく作りなおします。

1 巻

平凡社

東洋文庫

前嶋信次 訳

シャハリヤール王とその弟君の話

驢馬と牡牛との話

商人と魔王との物語

1 番目の長老の話

2 番目の長老の話

3 番目の長老の話

漁夫と魔王との物語

ユーナーン王の大臣の話

シンディバード王の話

裏切者の大臣の話

石に化した王子の話

荷担ぎやと三人の娘の物語

第一の遊行僧の話

第二の遊行僧の話

嫉み男と嫉まれ男の話

第三の遊行僧の話

一番年長の娘の話（または第一の娘と二匹の黒犬の話）

門番の女の話（または打傷のある第二の娘の話）

2 巻

平凡社

東洋文庫

前嶋信次 訳

三つの林檎の物語

大臣ヌールツ・ディーンとシャムスツ・ディーンの話

せむしの物語

クリスチャンの仲買人の話

お台所監督の話

ユダヤ人の医者の話

裁縫師の話

理髪師の話

理髪師の一番目の兄の話

理髪師の二番目の兄の話

理髪師の三番目の兄の話

理髪師の四番目の兄の話

理髪師の五番目の兄の話

理髪師の六番目の兄の話

裁縫師の話の結末

3巻

平凡社

東洋文庫

前嶋信次 訳

ヌールッ・ディーン・アリーとアニスッ・ジャリースの物語

狂恋の奴隷ガーニム・イブン・アイユーブの物語（または商人アイユーブとその息子ガーニムおよびその娘フィットナの物語）

黒奴ブハイトの因果話

黒奴カーフルの因果話

オマル・ブヌ・アン・ヌウマーン王とそのふたりの御子シャルカーンとダウール・マカーン、そしてこの人たちに起こった驚異・珍奇な物語

シャルカーンと大臣ダンダーンがオマル・ブヌ・アン・ヌウマーン王の命を受け、コンスタンティノーブルの皇帝アフリードゥーンを助けるためアルメニア王との戦いに出発する話

シャルカーンとハルドゥーブ王の娘アブリーザ姫との話

アブリーザ姫とオマル・ブヌ・アン・ヌウマーン王の話

アブリーザ姫とガドバーンという黒人奴隷、およびその者が姫を殺害する話

シャルカーンが父王のもとを去り、ダマスクスに滞在する話

ダウール・マカーンが妹ヌズハトッ・ザマーンとともに父に内緒で聖地巡礼に出る話

ダウール・マカーンとヌズハトッ・ザマーンが聖地巡礼より戻り、エルサレムにて互いに別れる話

ダウール・マカーンと浴場の火夫との話

ヌズハトッ・ザマーンとハンマードという牧人の話

4巻

平凡社

東洋文庫

前嶋信次 訳

ヌズハトツ・ザマーンと商人の話
ヌズハトツ・ザマーンとシャルカーンとの話
ダウール・マカーンと火夫の話
ふたりしてヌズハトツ・ザマーンの一行とともにバグダードに旅すること
侍従と大臣ダンダーンの話またオマル・ブヌ・アン・ヌウマーン王他界のいきさつ
オマル・ブヌ・アン・ヌウマーン王暗殺のいきさつ話
シャルカーンとダウール・マカーンが聖戦の軍を整える話
ムスリミーンの軍、おおいにキリスト教徒軍と戦う話
ハルドゥーブ王の母まがつびの媼の姦計の話
再びムスリミーンの軍、おおいにキリスト教徒軍と戦う話
シャルカーンとアフリードゥーン帝が決闘し、シャルカーンが傷つく話
ダウール・マカーンがハルドゥーブ王を討ち取る話
シャルカーンがまがつびの媼に虐殺され、山中に埋葬される話
ダウール・マカーンが将士とともにシャルカーンために哀歌を詠じて悼む話

5 卷

平凡社

東洋文庫

前嶋信次 訳

タージル・ムルークとドゥンヤー姫の物語
—恋いこがれたものと恋い慕われたもの—
スライマーン・シャーの話
タージル・ムルークの話
アジーズとアジーザの話
タージル・ムルークとドゥンヤー姫の話
ダウール・マカーンがコンスタンティノーブルの包囲からバグダードに帰る話
ダウール・マカーンと火夫との話
ダウール・マカーンとその姪クディヤ・ファカーンの話
ダウール・マカーンが病にてみまかる話
カーン・マー・カーンとクディヤ・ファカーンの話
カーン・マー・カーンがバグダードから旅に出る話
カーン・マー・カーンと牧人との話
カーン・マー・カーンと騎者ガッサーンとの話
カーン・マー・カーンがギリシア人と戦う話
カーン・マー・カーンがカハルダーシュと闘う話
カーン・マー・カーンとサーサーン王との話
ハシーシュ食いの話
カーン・マー・カーンが捕らえられたのち、助かる話

牧人ハンマードの話

6 卷

平凡社

東洋文庫

前嶋信次 訳

鳥獣と人間との物語

聖者と鳩との物語

水禽とカメとの物語

狼と狐との物語

タカとウズラとの話

ネズミとイタチとの物語

カラスと猫との物語

狐とカラスとの物語

ノミとネズミとの話

タカと肉食鳥どもとの話

スズメとワシとの話

ハリネズミとキジ鳩との物語

商人とふたりの詐欺師との話

盗人と猿との物語

愚かな織匠の話

孔雀とスズメとの物語

アリー・ビン・バッカーとシャムス・ウン・ナハールとの物語

カマル・ウッ・ザマーンの話（またはシャハリマーン王とその子カマル・ウッ・ザマーンとの物語）

カマル・ウッ・ザマーンと鬼女マイムーナとの話

マイナムとダナハシュとの話

カマル・ウッ・ザマーンとブドゥール姫との話

カマル・ウッ・ザマーンとその宦官との話

カマル・ウッ・ザマーンと宰相との話

カマル・ウッ・ザマーンとその父君との話

ブドゥール姫とその父君との話

ブドゥール姫とその乳兄弟マルザワーンとの話

マルザワーンの旅の話

マルザワーンとカマル・ウッ・ザマーンとがめぐり会う話

7 卷

平凡社

東洋文庫

前嶋信次 訳

マルザワーンとカマル・ウッ・ザマーンとの旅の話

カマル・ウッ・ザマーンがブドゥール姫とめぐりあう話

カマル・ウッ・ザマーンとブドゥール姫とが旅立つ話

カマル・ウッ・ザマーンと鳥との話

カマル・ウッ・ザマーンと樹園管理人との話

夫が失踪したあとのブドゥール姫の話

ブドゥール姫とハヤート・ウン・ヌフースとの話

シャハリマーン王が御子カマル・ウッ・ザマーンを嘆き悲しむ話

樹園管理人のもとでのカマル・ウッ・ザマーンの話

ブドゥール姫と船長との話

カマル・ウッ・ザマーンとブドゥール姫とが再開する話

カマル・ウッ・ザマーンとハヤート・ウン・ヌフース姫との話

カマル・ウッ・ザマーンのふたりの御子アル・アムジャドとアル・アスアドとの話

アル・アムジャドとアル・アスアドとハージンダールとの話

アル・アムジャドとアル・アスアドが山中を旅する話

アル・アスアドと拝火教徒バハラームとの話

アル・アムジャドと仕立屋との話

アル・アムジャドと女とそしてバハラームとの話

アル・アスアドと拝火教徒はバハラームとの話

アル・アムジャドとアル・アスアドとがめぐり会う話

ニイマ・ビン・アル・ラビーとその女奴隷ヌウムとの物語

カマル・ウッ・ザマーンの物語の残り

アラーツ・ディーン・アブーツ・シャーマートの物語（ほくろのアラディン物語）

8巻

平凡社

東洋文庫

前嶋信次 訳

ハーティム・ウッ・ターイの物語

マアン・ブヌ・ザイーダの物語

ラブタイトの町の物語（またはレプタの町の物語）

アブドル・マリクの御子ヒシャームと年若い牧人の物語

アル・マハディーの子イブラーヒームの物語

アブドラー・ブム・アビー・キラバの物語（またはアブドラー・ブム・アビー・キラバと円柱の都

イラムの物語)

モスルのイスハークの話

屠殺情の掃除夫とある貴婦人との話

カリフ、ハールーン・アル・ラシードと、にせカリフ（または第二のカリフ）との物語

ペルシア人アリーの物語

カリフ、ハールーン・アル・ラシードと女奴隷、そしてアブー・ユースフ大師の物語（またはイマーム・アブー・ユースフがどうしてカリフ、ハールーン・アル・ラシードとその大臣ジャアファルとを窮地から救い出したかという物語）

ハーリド・イブン・アブドッラー・アル・カスリーの物語（または恋人の名誉を救うため泥棒になりすました若者の物語）

バルマク家のジャアファルの寛仁さとそら豆売りの物語

ものぐさのアブー・ムハンマドの話

バルマク家のヤフヤー・ブヌ・ハーリドの度量の広い物語

ヤフヤー・ブヌ・ハーリドが自分の偽手紙を書いた男に度量を示した話

カリフ、アル・マームーンと異国の学者との物語

アリー・シャルとズムツルドとの物語

ジュバイル・ブヌ・ウマイルとブドゥールとの恋物語

9 卷

平凡社

東洋文庫

前嶋信次 訳

ヤマンのそれがしと六人の女奴隷の物語（またはカリフ、アル・マームーンの御所でバスラのムハンマドの物語った六人の女奴隷の品定めの話）

ハールーン・アル・ラシードとある女奴隷とアブー・ヌワースとの物語

犬の食い残しを食べ、それがはいていた黄金の皿を盗み取った男の物語

アレクサンドリヤの詐欺師と警察長官との話

アル・マリク・ウン・ナーシルと三人の警察長官の物語

カイロの警察長官の話

ブーラークの警察長官の話

古カイロの警察長官の話

盗人と両替商との物語

クースの警察長官といかさま師との物語

イブラーヒーム・イブヌル・マハディーとある商人との物語

貧者に施しをして両手を国王のため斬られた女の話

信心家のイスラエル人の話

アブー・ハッサーン・ウツ・ズィヤーディーとホラーサーンの男との話

困ったときの友は真の友という話

貧乏してのち、また金持ちとなった富人の話（または運命に背かれ極貧となった富人の話）

カリフ、アル・ムタワッキルと女奴隷マハブーバとの物語

屠殺人ワルダーンと美女と熊との物語

王女と猿との物語

黒檀の馬の物語

ウンス・ル・ウジュードとアル・ワルド・フィール・アクマームとの物語

アブー・ヌワースと三人の若衆とカリフとの物語

アブドッラー・ブヌ・マアマルとバスラ男とその女奴隷との話

ウドラ族の恋人たちの話

ヤマンのおとどとその弟君との話（またはヤマンの大臣バドル・ウッ・ディーンとその弟、および弟の師匠の話）

書塾での少年と少女との恋の話

アル・ムタラムミスとその妻との話

カリフ、ハールーン・アル・ラシードと泉水の中のズバイダ正妃との話

ハールーン・アル・ラシードと三人の詩人との話

アッ・ズバイルの子ムスアブとタルハの娘アイシャとの話

アブル・アスワドがその女奴隷を歌った話

ハールーン・アル・ラシードと二人の女奴隷との話

ハールーン・アル・ラシードと三人の女奴隷との話

粉屋とその妻との話

うつけ者と詐欺師との話

10巻

平凡社

東洋文庫

前嶋信次 訳

カリフ、ハールーン・アル・ラシードとズバイダ正妃との話（または法官アブー・ユースフとズバイダ正妃との話）

カリフ、アル・ハーキムとある商人との話

キスラー（ホスロー）・アヌーシルワーン王と農家の娘との話

水運びの男と金細工師の妻との話

ホスロー大王とシーリーンと漁師との話

バルマク家のヤフヤー・ブヌ・ハーリドと貧乏男との話

ムハンマド・アル・アミンとジャアファル・ブヌ・ムーサー・アル・ハーディーとの話

サイド・ブヌ・サーリム・アル・バーヒリーとバルマク家の御曹司たちの話

まんまと夫を騙した女の話

信仰心の篤いイスラエルの女と邪悪な二老人との話

カリフ、ハールーン・アル・ラシードとジャアファルと遊牧の老人との話

オマル・ブヌル・ハッターブと若い牧人との話
カリフ、アル・マームーンとピラミッドの話
盗人と商人との話
マスルールとイブヌル・カーリビーとの話（またはカリフ、ハールーン・アル・ラシードとイブヌル・カーリビー）
カリフ、ハールーン・アル・ラシードと苦行修道のその御子との話
歌を聞いて恋をした書塾の教師の話
愚かな教師の話
読み書きを知らぬ教師の話
ある国王と操正しい女との話
アブドル・ラフマーン・アル・マグリビーが語った巨鳥ルフの話
アディー・ブヌ・ザイドとアン・ヌウマーン王の娘ヒンドとの話
ディイビル・アル・フザーイーと女人とムスリム・ブヌル・ワリードとの話
モスルのイスハークと商人との話
三人の薄幸な恋人たちの話（または、老いた牧人の語った恋の話）
タイイー部族の恋人たちの話（または、カーシム・ブヌ・アディーの伝えたある恋物語）
恋に気の狂った男の話（または、アブル・アッバース・アル・ムバルラドが伝えた恋の物語）
イスラムに改宗した修道院長の話（または、アブー・バクル・ブヌ・ムハンマド・アル・アンバーリーが語ったアブドル・マシーフ・アル・ラーヒブの物語）
アブー・イーサーと女奴隷クルラトル・アインの恋物語
アル・アミーンとその叔父イブラーヒーム・イブヌル・マハディーとの話
カリフ、アル・ムタワッキルとアル・ファトフ・ブヌ・ハーカーンとの話美男と美女との優劣についてある女流学者が論争した話（またはハマーの町の女説教師の話）
アブー・スワイドときれいな老女との話
アリー・ブヌ・ムハンマド・ブヌ・アブドッラー・ブヌ・ターヒルと女奴隷ムーニスとの話
二人の女とその恋人たちとの話
カイロの商人アリーの話（またはバグダードの妖怪屋敷）
メッカ巡礼の男と老女との話
女奴隷タウッドの物語

11 卷

平凡社

東洋文庫

前嶋信次 訳

死の天使とたかぶる王者と篤信家との話

死の天使と富める王者との話

死の天使とイスラエルの民の王との話

イスカンダル・ドウル・カルナインと貧しい民との話（またはイスカンダル・ドウル・カルナインと貧に甘

んじている王者との話)

アヌーシルワーンがその統治に対して正義を旨とした話

イスラエルの子孫たちの法官と信心深いその妻との話

乗船が難破した婦人の話 (またはカアバの側の信心深い女人と預言者の子孫のひとりとの話)

信心深い黒人奴隷の話

イスラエルの子らのうちのある信心深い男の話 (または敬神家の木皿造り師とその妻との話)

ハッジャージ・ブヌ・ユースフと信心深い男との話

火中に手を入れてもやけどせぬ敬神の鍛冶屋の話

神が雲を駆使する力を授けたもうたある敬神家の話

カリフ、オマル・ブヌル・ハッターブのある教友の話 (またはあるムスリムの戦士とクリスチャンの娘との話)

イブラーヒーム・イブヌル・ハッワースとある王女との話 (またはクリスチャンの王女とあるムスリムとの話)

ある預言者と神の正義についての話

ナイルの渡し守とある聖者との話

ある島の王となった敬神家イスラエル人の話

アブル・ハサン・アッ・ダルラージュと癩を病むアブー・ジャアファルとの物語

蛇の女王の物語 (またはハーシブ・カリーム・ウッ・ディーンの物語)

ブルーキーヤーの話

ジャーン・シャーの話

12巻

平凡社

東洋文庫

前嶋信次 訳

海のシンドバードと陸のシンドバードとの物語

海のシンドバードの第一航海の話

海のシンドバードの第二航海の話

海のシンドバードの第三航海の話

海のシンドバードの第四航海の話

海のシンドバードの第五航海の話

海のシンドバードの第六航海の話

海のシンドバードの第七航海の話

海のシンドバードの第七航海の話 (Aテキスト)

黄銅城の物語

女たちのずるさとたくらみの物語 (または七人の大臣たちの物語)

ある国王とその大臣の妻との話

ある商人とおうむとの話

洗張やとその息子との話
道楽ものと貞節な妻との話
けちな男と二塊のパンの話
女とその二人の情人との話
ある王子とグーラ（鬼女）との話
一滴の蜂蜜の話
おのが亭主に土砂を篩いわけさせた女の話
魔法の泉の話

13巻

平凡社
東洋文庫
池田修 訳

浴場主とその妻の話
美女と放蕩者の話
金細工師と絵に描かれた乙女の話
一生涯笑わなかった男の話
ある王子と商人の妻の話
買われた奴隷と優雅な男の妻の話
国の高官らを手玉にとった女の話
聖断の夜に三つの願いをかけた男の話
風呂番女を懲らしめて後悔した王の話
雄雌二羽のハトの話
アッタトマー姫とペルシア王子の話
老婆と商人の息子の話
散策に出たある王子と魔物の話
盲目の老人と三歳と五歳の少年の話
商人ウマルと三人の息子、サーリムとサリームとジャウダルの物語
クンダミル王の子アジーブとガリーブの物語

14巻

平凡社
東洋文庫
池田修 訳

アブド・アッラーフ・ブヌ・マアマル・アルカシーとオトバ・ブヌ・アルジュッバーンの物語

アンヌアマーンの娘ヒンドとアルハッジャージュの物語
フザイマ・ブヌ・ビシュルとイクリマ・アルファイヤードの物語
書記ユーヌスと世継アルワリード・ブヌ・サフルの物語
ハールーン・アッラシードと娘たちの物語
ハールーン・アッラシードのご前での、三人の娘についてのアルアスマイーの物語
アブー・イスハーク・イブラーヒーム・アルマウシリーと悪魔アブー・ムッラの物語
カリフ、ハールーン・アッラシードとジャミール・ブヌ・マアマル・アルウズリーの物語
ベドウィンがムアーウィアに訴えたマルワーン・ブヌ・アルハカム悪業の物語
フサイン・アルハリールがハールーン・アッラシードのご前でしたバスラの女の恋物語
イスハーク・アルマウシリーと奴隷娘と盲人（悪魔）の物語
イブラーヒーム・ブヌ・イスハークと若者の物語
大臣アブー・アーミル・ブヌ・マルワーンとアルマリク・アンナーシル
アフマド・アッダナフとハサン・シャウマーンと女侍師ザイナブおよびその母の物語
エジプト人アリー・アッザイバクの物語
アッサイフ・アルアアザム・シャーの王子アズダシルとアブド・アルカーディル王の息女ハヤート・アンヌフース姫の恋物語

15巻

平凡社

東洋文庫

池田修 訳

ホラサーンのシャフルマーン王の物語

ムハンマド・サバーイク王と商人ハサンの物語

サイフ・アルムルークとバディーア・アルジャマールの物語

商人と金細工師と銅細工師を営むふたりの息子、および金細工師の息子ハサンとペルシア人の詐欺師にまつわる物語

16巻

平凡社

東洋文庫

池田修 訳

バグダードの漁師ハリーフアの物語

商人マスルールと彼が見た夢の物語

17巻

平凡社

東洋文庫

池田修 訳

ヌール・アッディーンと帯編娘マルヤムの物語

カイロの領主シュジャーウ・アッディーン・ムハンマドと褐色男の物語

バグダードの金持ちと奴隷娘の物語

インドの王ジュライアードと大臣シャンマースの物語

猫と鼠の物語

頭にバターをかけられた行者の話

池の魚の話

鴉と蛇の話

野生のロバと狐の話

旅をする王子の話

鴉の話

蛇使いとその妻と子供と一家の者の話

蜘蛛と風の話

公正な王と邪悪な王の話盲人と両足の萎えた男の話

漁夫の話

若者と泥棒の話

妻のために身を亡くした男の話

商人と泥棒たちの話

狐と狼の話

羊飼いと泥棒の話

黒雷鳥と亀の話

18巻

平凡社

東洋文庫

池田修 訳

染め物屋アブー・キールと床屋アブー・シールの物語

陸のアブド・アッラーフと海のアブド・アッラーフの物語

教王（カリフ）ハールーン・アッラシードとアブー・アルハサン・アルオマーニーの物語

エジプト領主アルハシーブの息子イブラーヒームの物語

教王（カリフ）アルムウタディド・ビッラーヒとホラサーンのアフマドの息子アブー・アルハサン・アーリーの物語

商人アブド・アッラフマーンとその息子カマル・アッザマーンの話

アブド・アッラーフ・ブヌ・ファーディルと兄弟たちの話

靴直しマアルーフとその妻ファーティマの話

アラビアン・ナイト 別巻

平凡社

東洋文庫

前嶋信次 訳

アラジンとアリババ

アラッ・ディーンと魔法のランプの話

アリ・ババと四十人の盗賊の話

バートン版 もくじ

バートン版 もくじ（私の所有する河出書房全 8 巻より）

- 1
- シャーリヤル王とその弟の物語
- 牡牛と驢馬の話
- 商人と魔神の物語
- 一番めの老人の話
- 二番めの老人の話
- 三番めの老人の話
- 漁師と魔神の物語
- 大臣と賢人ズバンの話
- シンディバッド王と鷹の話
- 亭主と鸚鵡の話
- 王子と食人鬼の話
- 魔法にかかった王子の話
- バグダッドの軽子と三人の女
- 最初の托鉢僧の話
- 二番めの托鉢僧の話
- ねたみ深い男とねたまれた男の話
- 三番めの托鉢僧の話
- 姉娘の話
- 門番女の話
- 三つの林檎の物語
- ヌル・アル・ディン・アリとその息子バドル・アル・ディン・ハサンの物語
- せむし男の物語
- ナザレ人の仲買人の話
- 料理頭の話
- ユダヤ人の医者の話
- 仕立屋の話
- 床屋の身の上話
- 床屋の長兄の話
- 床屋の二番めの兄の話
- 床屋の三番めの兄の話
- 床屋の四番めの兄の話
- 床屋の五番めの兄の話
- 床屋の六番めの兄の話
- 仕立屋の話の結び
- ヌル・アル・ディン・アリと乙女アニス・アル・ジャリスの物語
- 恋に狂った奴、ガーニム・ビン・アイユブの物語

最初の宦官ブハイトの話

二番めの宦官カフルの話

2

オマル・ビン・アル・ヌウマン王とふたりの息子シャルルカンとザウ・アル・マカンの物語

タジ・アル・ムルクとドウニャ姫の話

アジズとアジザーの話

麻薬を飲んだ男の話

バダウィ人ハマッドの話

鳥と獣と大工の物語

隠者の話

水鳥と亀の物語

狼と狐の話

はやぶさとしゃこ

二十日鼠と猫いたちの話

猫と鳥の話

狐と鳥の話

のみと二十日鼠

雌鷹と小鳥

雀と鷺

はり鼠とじゅずかけ鳩の話

商人とふたりのぺてん師

泥棒と猿の話

馬鹿な機織工

雀と孔雀の話

アリ・ビン・バツカルとシャムス・アル・ナハルの物語

カマル・アル・ザマンの物語

3

ニアマー・ビン・アル・ラビアとその奴隷娘ナオミの物語

アラジン・アブ・アル・シャマトの物語

タイイ族のハティム

ザイダーの子マアンの話

ザイダーの子マアンとバダウィ人

ラブタイトの都

ヒシャム教主とアラブ人の若者

イブラヒム・ビン・アル・マーディと理髪外科医

円柱の多い都イラムとアビ・キラバーの子アブズラー

モスルのイサアク

掃除夫と上臈

いかさま教主

ペルシャ人アリ

ハルン・アル・ラシッドと奴隷娘と導師アブ・ユスフの話

泥棒のふりをした恋人の話

バルマク家のジャアファルと豆売り

怠け者のアブ・モハメッド

バルマク家のヤーヤ・ビン・ハリドがマンスルを寛大にあつかった話

にせ手紙を書いた男にハリドの子ヤーヤが情けをかけた話

アル・マアムン教主と異国の学者

アリ・シャルとズムルッド

ジュバイル・ビン・ウマイルとズズル姫の恋

アル・ヤマンの男と六人の奴隷娘

ハルン・アル・ラシッド教主とひとりの乙女とアブ・ノワス

犬皿に使った黄金の皿を盗んだ男

アレキサンドリアのいかさま師と警備頭

アル・マリク・アル・ナシルと三人の警備頭

カイロの警備頭の話

ブラックの警備頭の話

旧カイロの警備頭の話

泥棒と両替屋

クスの警備頭とぺてん師

イブラヒム・ビン・アル・マーデイと商人の妹

貧者に物を施して両手を切られた女の話

信心深いイスラエル人

アブ・ハサン・アル・ジャディとホラサンの男

貧しい男と親友

おちぶれた男が夢のお告げで金持ちになった話

アル・ムタワッキル教主と側女マーブバー

肉屋のワルダンが女と熊を相手に冒険をした話

王女と猿

黒檀の馬

ウンス・アル・ウユドと大臣の娘アル・ワルド・フィル・アクマム

アブ・ノワスに三人の美少年とハルン・アル・ラシッド教主

アブダラー・ビン・マアマルにバツソラーの男とその奴隷女

オズラー族の恋人たち

アル・ヤマンの大臣と若い弟

授業中の少年と少女の恋

アル・ムタラムミスと妻のウマイマー

ハルン・アル・ラシッド教主と水浴中のズバイダー妃

ハルン・アル・ラシッドと三人の詩人

ムスアブ・ビン・アル・ズバイルとタラーの娘アイシャー

アブ・アル・アスワドと奴隷娘

ハルン・アル・ラシッド教主とふたりの奴隷娘
ハルン・アル・ラシッド教主と三人の奴隷娘
粉屋とその女房
薄ばかといかさま師
判官アブ・ユスフにハルン・アル・ラシッド教主とズバイダー妃

4

アル・ハキム教主と商人
キスラ・アヌシルワン王と村の娘
水汲み男と細工師の女房
フスラウ王と妃シリンと漁師
バルマク家のヤーヤ・ビン・ハリドと貧乏な男
モハメッド・アル・アミンと奴隷女
ヤーヤ・ビン・アル・ハリドの息子たちとサイド・ビン・サリム・アル・バヒリ
亭主をだました女房の策略
信心深い女と邪まなふたりの老人
バルマク家のジャアファルと年老いたバダウイ人
オマル・ビン・アル・ハッタブ教主と若いバダウイ人
アル・マアムン教主とエジプトのピラミッド
盗人と商人
宦官マスルールとイブン・アル・カリビ
行者の王子
歌を聞いて恋におちた愚かな先生
あほうな先生
学校の先生になりすましたあき盲
王と貞淑な妻
マグリビ人アブド・アル・ラーマンの大鳥の話
アディ・ビン・ザイドと王女ヒンド
ディイビル・アル・フザイと上臈とムスリム・ビン・アル・ワリド
モスルのイサアクと商人
三人の不幸な恋人
アブ・ハサンが屁をした話
タイイ族の恋人たち
恋に狂った男
回教徒になった副修道院長
アブ・イサとクラト・アル・アインの恋
アル・ラシッドの子アル・アミンと叔父イブラヒム・ビン・アル・マーディ
アル・ファス・ビン・ハカンとアル・ムタワッキル教主
男女の優劣についてある男が女の学者と議論した話
アブ・スワイドとこぎれいな老婆
アリ・ビン・タヒル太守とムウニスという娘

若いつばめをもった女と大人を情夫にもった女
カイロ人のアリとバグダッドの幽霊屋敷
巡礼男と老婆
アブ・アル・フスンと奴隷娘のタワズド
死の天使と高慢な王と道士
死の天使と富裕な王
死の天使とイスラエルの子孫の王
イスカンダル・ズ・アル・カルナインと貧しい人々
アヌシルワン王の威徳
ユダヤ人の判官と貞節な妻
難船の憂きめにあつた女とその子供
信心深い黒人奴隷
道心堅固な盆作りとその女房
アル・ハッジジャジと信心家
火をつかんでも平気な鍛冶屋
神から雲を授けられた信者と敬虔な国王
回教徒の戦士とキリスト教徒の乙女
キリスト教王の王女と回教徒
予言者と神の審き
ナイル川の渡し守と隠者
島の王と敬虔なイスラエル人
アブ・アル・ハサンと癩患者アブ・ジャアファル
巨蛇の女王 (ブルキヤの冒険 ヤンシャーの話)
船乗りシンドバッドと軽子のシンドバッド
船乗りシンドバッドの最初の航海
船乗りシンドバッドの第二の航海
船乗りシンドバッドの第三の航海
船乗りシンドバッドの第四の航海
船乗りシンドバッドの第五の航海
船乗りシンドバッドの第六の航海
船乗りシンドバッドの第七の航海
船乗りシンドバッドの第七の航海 (カルカッタ版による)
真鍮の都
女の手管と恨み (王子と側女と七人の大臣の物語)

(王と大臣の妻、菓子屋とその女房と鸚鵡、洗い張り屋と息子、遊冶郎の策略 と貞節な妻、けちん坊とパン、浮気女とふたりの情夫、王子と食人鬼、一滴の蜂蜜、夫に泥をふるわせた女房、魔力をもった泉、大臣の息子と風呂屋の女房、亭主をだました女房の策略、金細工人とカシミルの歌姫、長い生涯に一度も笑わなかった男)

女の手管と恨み (王子と側女と七人の大臣の物語)
王子と商人の妻
鳥の話がわかるふりをした小姓
人妻と五人の求愛者
三つの願 (神の夜を見たがった男の語)
盗れた首飾り
二羽の鳩
ベーラム王子とアル・ダトマ王女の物語
見晴らし台のある屋敷
王子と魔神の情婦
白檀商といかさま師
放蕩者と三歳の童子
盗まれた財布
狐と人間
ジュダルとその兄
ガーリブとその兄アジブの身の上話
オトバーとライヤ
アル・ヌーマンの娘ヒンドとアルハッジャジ
ビシュルの子フザイマーとイクリマー・アル・ファイヤズ
学者ユヌスとワリドビン・サール教主
ハルン・アル・ラシッド教主とアラビア娘
アル・アスマイとバツソラーの三人の乙女
モスルのイブラヒムと悪魔
ウズラー族の恋人たち
バダウイ人とその妻
バツソラーの恋人たち
モスルのイシャクとその恋人と悪魔
アル・メディナーの恋人たち
アル・マリク・アル・ナシルとその宰相
やりて婆のダリラと兎とりの娘ザイナブが悪戯を行なったこと
カイロの盗神アリの奇談
アルダシルとハヤット・アル・ヌフス姫
海から生まれたジュルナールとその子のペルシャ王バドル・バシム
モハメッド・ビン・サバイク王と商人ハサン
サイフ・アル・ムルク王子とバディア・アル・ジャマル王女の話

6

バツソラーのハサン
バグダッドの漁師ハリファー
バグダッドの漁師ハリフ
マスルールとザイン・アル・マワシフ

アリ・ヌル・アル・ディンと帯作りのミリアム姫
上エジプトの男とフランク人の妻
落ちぶれたバグダッドの男と奴隷女
インドのジャリアッド王と宰相シマス
二十日鼠と猫
托鉢僧とバターの甕
魚と蟹
鴉と大蛇
野生の驢馬と豺
非道な王と巡礼の王子
鴉と鷹
蛇使いとその女房
蜘蛛と風
ふたりの王
盲とちんば
愚かな漁師
少年と泥棒
亭主と女房
商人と盗人
豺と狼
羊飼いと泥棒
鷓鴣と亀

7

紺屋のアブ・キルと床屋のアブ・シル
漁師のアブズラーと人魚のアブズラー
ハルン・アル・ラシッド教主とオマンの商人アブ・ハサンの話
イブラヒムとジャミラー
ホラサンのアブ・アル・ハサン
カマル・アル・ザマンと宝石商の妻
アブズラー・ビン・ファジルとその兄弟
靴直しのマアルフとその女房ファティマー
巻末論文 序文
第一章 『千夜一夜物語』の起原
第二章 ヨーロッパの『千夜一夜物語』
第三章 内容と形式
第四章 社会状況

8

眠っている者と目覚めている者
ならず者と料理人の話

十人の大臣（アザドバフト王とその王子の物語）

運命に見離された商人の話

商人とその息子たちの話

アブ・サビルの話

ビーザッド王子の話

ダドビン王とその大臣たちの話

バフトザマン王の話

ビーカルド王の話

アイラン・シャーとアブ・タンマムの話

イブラヒム王とその王子の話

スライマン・シャー王と姪の話

アラールに救われた囚人の話

ジャアファル・ビン・ヤーヤとアッバス家のアル・マリク・ビン・サリー

アル・ラシッド教王とバルマク家

アル・マアムン教王とズバイダー

シャー・バフト王とその大臣アル・ラーワン

艶歌師と薬屋

美しい娘を貧しい老人に嫁がせた男の話

賢者と三人の息子の話

洗張り屋とその女房と騎兵の話

ばか亭主の話

強盗と女の話

三人の男とわれらの主イサの話

弟子の話

王座と富をとり返した王の話

知らぬ男に屋敷と料理を提供した男の話

ふさぎ屋とべてん師の話

ハルバスとその妻と学者

お互いに騙しあったふたりのいかさま師の話

いかさま師と両替屋と驢馬の話

王と侍従の妻

老婆と呉服商のお内儀

アル・マリク・アル・ザヒル・ルクン・アル・ディン・ビバルス・アル・ブンズクダリと十六人の与力

最初の捕吏秘談

三番めの捕吏秘談

八番めの捕吏秘談

盗人の話

女のたくらみ

側女と教王

アル・マアムン教王の側女

アラジン、または不思議なランプ

教主の夜の冒険

盲のババ・アブズラーの話

シディ・ヌウマンの話

縄作りのフワジャー・ハサンの話

アリ・ババと四十人の盗賊

ばか亭主の話

シナの三人の王子

カイロの若者と床屋と隊長

カイロの人妻と四人の色男

仕立屋と人妻と隊長

シリア人とカイロの三人の女

ふたつの門を持った人妻

貞淑を自慢した淫らな人妻

百姓とその悪妻

夫を犠牲にして恋人のきげんをとった女

父の妻たちをなぐさんだ若者の話

アル・ブンズカニ、またはハルン・アル・ラシッド教主とキスラ王の娘の物語

バートン小伝

マルドリユス版 もくじ（私の私有本より）

岩波文庫13巻、★ちくま文庫10巻

1 (1-24)

★1

シャハリヤール王と弟シャハザマーン王との物語

驢馬と牛と農夫との寓話

商人と鬼神との物語

第一の老人の話

第二の老人の話

第三の老人の話

漁師と鬼神との物語

イウナン王の大臣と医師ルイアンの物語

シンディバード王の鷹

王子と食人鬼との物語

魔法にかけられた若者と魚の物語

荷かつぎ人足と乙女たちとの物語

第一の托鉢僧の話

第二の托鉢僧の話

第三の托鉢僧の話

第一の乙女ゾバイダの話

第二の乙女アミナの話

斬られた女と三つの林檎と黒人リハンとの物語

大臣ヌーレディンとその兄大臣シャムセディンとハサン・バドレディンの物語

2 (24-44)

せむしの男および仕立屋とキリスト教徒の仲買人と御用係とユダヤ人の医者との物語

キリスト教徒の仲買人の話

シナ王の御用係の話

ユダヤ人の医者の話

★2

仕立屋の話

足の悪い若者とバグダードの床屋の物語

バグダードの床屋とその六人の兄の物語

床屋の物語

床屋の第一の兄バクブークの物語

床屋の第二の兄エル・ハダールの物語

床屋の第三の兄バクバクの物語

床屋の第四の兄エル・クーズの物語

床屋の第五の兄エル・アスシャルの物語

床屋の第六の兄シャカーリクの物語

アニス・アル・ジャリスとアリ・ヌールの物語

ガネム・ベン・アイユーブとその妹フェトナーの物語

スーダンの第一の黒人、宦官サワープの物語

スーダンの第二の黒人、宦官カーフルの物語

スーダンの第三の黒人、宦官バキータの物語

3 (44-129)

オマル・アル・ネマーン王とそのいみじき二人の王子シャルカーンとダウールマカーンとの物語

三つの門についての言葉

★3 オマル・アル・ネマーン王の崩御の物語ならびにそれに先立つ至言

第一の乙女という言葉

第二の乙女という言葉

第三の乙女という言葉

第四の乙女という言葉

第五の乙女という言葉

老婆という言葉

僧院の物語

アズィーズとアズィーザと美わしき王冠太子の物語

美男アズィーズの物語

4 (130-236)

ドニヤ姫と王冠太子の物語

ダウールマカーン王の崩御

ダウールマカーンの王子、若きカンマカーンの冒険

鳥獣佳話

鶯鳥と孔雀の夫婦の話

羊飼いと乙女の挿話

亀と漁師鳥の話

狼と狐の話

小鼠と鼯の話

鳥と麝香猫

鳥と狐の話

美しきシャムスエンナハールとアリ・ベン・ベッカル

★4

カマラルザマーンとあらゆる月のうち最も美しい月、ブドゥール姫との物語

5 (237-331)

「幸男」と「幸女」の物語

「ほくろ」の物語

「博学のタワッド」の物語

詩人アブー・ヌワースの事件

船乗りシンドバードの物語

船乗りシンドバードの物語の第一話

船乗りシンドバードの物語の第二話

船乗りシンドバードの物語の第三話

船乗りシンドバードの物語の第四話

船乗りシンドバードの物語の第五話

船乗りシンドバードの物語の第六話

船乗りシンドバードの物語の第七話

美しきズームルッドと「栄光」の息子アリシャールとの物語

6 (331-414)

★5

「喜び」色異なる六人の乙女の物語

青銅の町の綺談

イブン・アル・マンスールと二人の乙女の物語

肉屋ワルダーンと大臣の娘の話

地下の姫、ヤムリカ女王の物語

ブルキヤの物語

悲しみの美青年の物語

智慧の花園と粋の庭

アル・ラシードとおなら

若者とその先生

不思議な袋

愛の審判者アル・ラシード

いずれを選ぶか？ 青年か、はたまた、壮年か？

胡瓜の値段

白髪

悶着解決

アブー・ヌワースとセット・ゾバイダの浴み

アブー・ヌワースの即詠

驢馬

セット・ゾバイダの現行犯

雄か、雌か？

分け前

学校の先生

下着の縫取り文

杯の彫り込み文

箱の中の教王

臍物の掃除夫

乙女「涼し眼」

乙女か、青年か？

奇怪な教王

「薔の薔薇」と「世の物語」

7 (414–515)

黒檀の馬奇談

「女peteん師ダリラ」とその娘の「女いかさま師ザイナブ」とが、「蟻のアフマード」や「ペストのハサン」や「水銀のアリ」とだましあいをした物語

★6

漁師ジウデルの物語または魔法の袋

アブー・キールとアブー・シールの物語

『匂える園』の道話

三つの願い事

若者と風呂やのあんま

白にもいろいろ

陸のアブドゥッラーと海のアブドゥッラーの物語

8 (515–622)

黄色い若者の物語

「柘榴の花」と「月の微笑」の物語

「モースルのイスハーク」の冬の一夜

エジプトの百姓とその色白き子供たち

カリーフと教王の物語

ハサン・アル・バスリの冒険

★7

陽気で不作法な連中の座談集

歴史的な放屁

二人の悪戯者

女の策略

9 (622–774)

眼を覚ました永眠の男の物語

ザイン・アル・マワシフの恋

無精な若者の物語

若者ヌールと勇ましいフランク王女の物語

寛仁大度とは何、世に処する道はいかにと論じ合うこと

サラディンとその大臣の物語

比翼塚

ヒンドの離婚

処女の鏡の驚くべき物語

アラジンと魔法のランプの物語

10 (774–826)

人の世のまことの智慧のたとえ話

薔薇の微笑のファリザード

★8

カマールと達者なハリマとの物語
羊の脚の物語
運命の鍵
巧みな諧謔と愉しい頓知の集い
減らない草履
アル・ラシードの道化役バハルル
世界平和への誘い
不能のお呪い
二人のハシーシュ食らいの物語
法官「屁の父」の物語
法官の驢馬
法官と仔驢馬
抜け目のない法官
女道楽の達人の訓え
ハシーシュ食らいの判決
ヌレンナハール姫と美しい魔女の物語
「真珠華」の物語
帝王マハムードの二つの世界
底なしの宝庫

11 (826–881)

気の毒な不義の子の込みいった物語
若者の猿の物語
第一の狂人の物語
第二の狂人の物語
第三の狂人の物語
九十九の晒首の下での問答
細君どもの腹黒さ
菓子屋の話した物語
八百屋の話した物語
肉屋の話した物語
豎笛吹きの話した物語

★ 9

アリ・ババと四十人の盗賊の物語
バグダード橋上でアル・ラシードの出会った人たち
白い牝馬の主人の若者の物語
インドとシナの曲を奏する人々を従えた馬上の若者の物語
気前のよい掌の老人の物語
口の裂けた負具の学校教師の物語
橋上で頬を殴ってもらう盲人の物語
スレイカ姫の物語

12 (881–940)

のどかな青春の団欒
頑固な頭の少年と小さな足の妹
足飾り
王女と牡山羊の物語
王子と大亀の物語
エジプト豆売りの娘
解除人
警察隊長
誰がいちばん寛大か？
去勢された床屋
ファイルーズとその妻
生まれと心
不思議な書物の物語
金剛王子の華麗な物語
滑稽頓知の達人のさまざまな奇行と戦術

★ 10

乙女「心の傑作」鳥の女代官の物語
バイバルス王と警察隊長たちの物語
第一の警察隊長の語った物語
第二の警察隊長の語った物語

13 (940-1001)

第三の警察隊長の語った物語
第四の警察隊長の語った物語
第五の警察隊長の語った物語
第六の警察隊長の語った物語
第七の警察隊長の語った物語
第八の警察隊長の語った物語
第九の警察隊長の語った物語
第十の警察隊長の語った物語
第十一の警察隊長の語った物語
第十二の警察隊長の語った物語
海の薔薇とシナの乙女の物語
蜂蜜入りの乱れ髪菓子と靴直しの禍いをまきちらす女房との物語
知識と歴史の天窓
詩人ドライド、その高邁な性格と高名の女流詩人トゥマーディル・エル・ハンサーへの恋
詩人フィンドとその二人の娘、女丈夫日輪オフアイラと月輪ホゼイラ
王女ファーティマと詩人ムラキースとの恋の冒険
フジル王の復讐
妻からの夫の品定め
両断者ウマル
歌姫空色のサラマー

押しかけ客

薄命の寵姫

悲しき首飾り

モースルのイスハークと新曲

二人の舞姫

落花生油のクリームと法学上の問題解決

泉のアラビア娘

しつこさの報い

ジャアファルとバルマク家の最期

ジャスミン王子とアーモンド姫の優しい物語

大団円

おはよう千一夜

<http://p.booklog.jp/book/63331>

著者 : den4ro

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/den4ro/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/63331>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/63331>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパバー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ